

未来を創る子供たちの育成に向けて

埼玉教育

第1号
令和5年5月
No.821

特集

- ① 確かな学力の育成
- ② 働き方改革の実現にむけて



～教師の「問い」がよりよい未来を考える児童を育成する～

川口市立鳩ヶ谷小学校 主幹教諭 堀 祥子



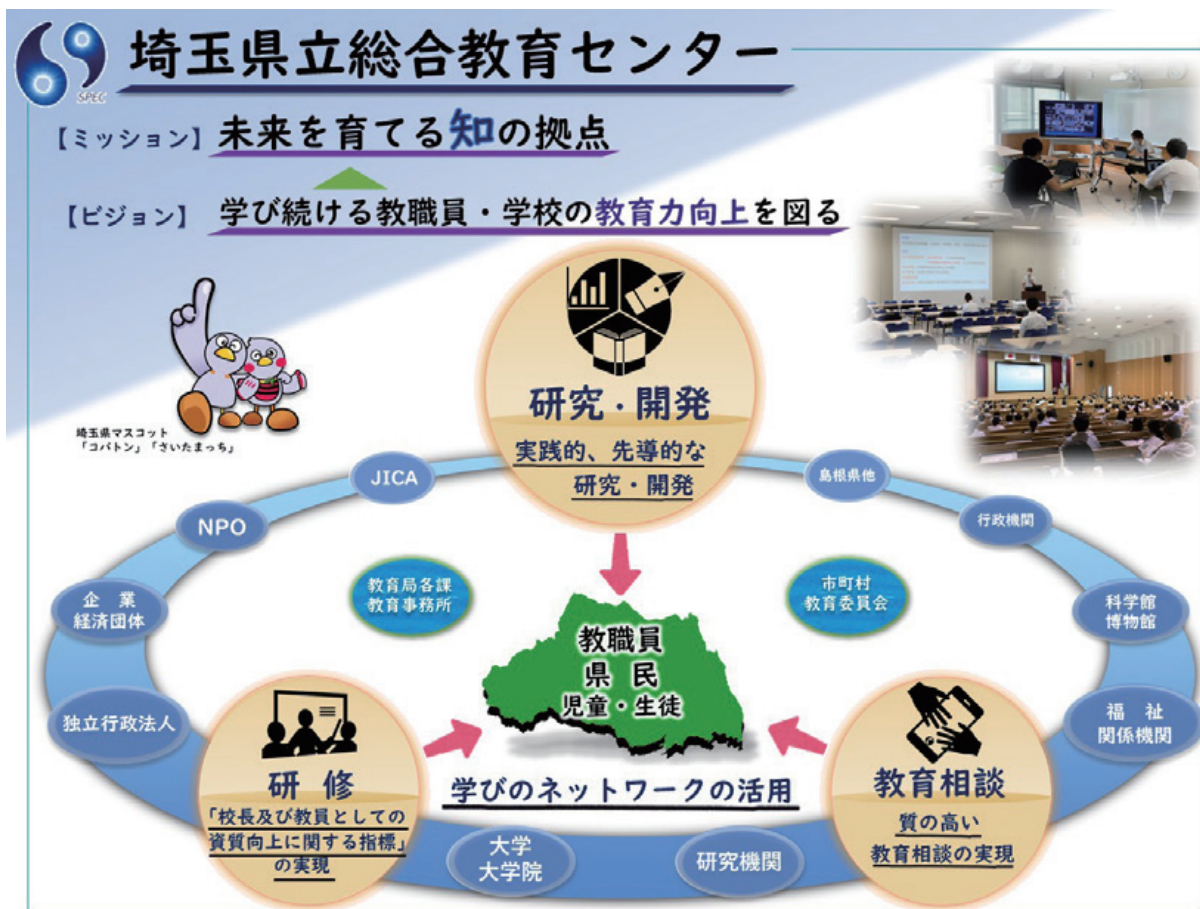
[コバトン]

埼玉県立総合教育センター



[さいたまっち]

令和5年度埼玉県立総合教育センター運営コンセプト



調査研究についての紹介

当センターの筆頭事業である「研究・開発」の一端を担う、調査研究事業について紹介します。詳しくは当センターホームページ（右の二次元コード）から御参照ください。



令和4年度で完結した調査研究	担当
G I G Aスクール構想における1人1台／BYOD環境を活かしたICTの活用	教職員研修担当
特別支援教育におけるICT機器の効果的な活用に関する調査研究 ～教員と子供の味方となる「彩の国みんなのみかたプログラム」の開発～	特別支援教育担当
「児童生徒のインターネットゲーム障害の予防や早期発見のための研修および教材の開発」に資する調査研究	指導相談担当
特別支援学校生徒に対する農業分野への就労支援に関する調査研究	農業教育・環境教育推進担当
令和5年度も継続中の調査研究	担当
「校務効率化」を実現する校内組織マネジメントの向上に関する調査研究 (中間報告)	企画調整担当・教育DX担当

企画調整担当・教育DX担当の調査研究事業の中間報告はp 45です。

令和5年度「埼玉教育」第1号（春号） 目次

目次		1
巻頭挨拶		
令和5年度を迎えて ～ポストコロナにおける埼玉教育の更なる発展のために～	埼玉県教育委員会 教育長 高田 直 芳	2
巻頭挨拶		
未来を創る子供たちの育成に向けて	県立総合教育センター 所長 田中 洋 安	3
巻頭言		
「教師の資質向上に関する指針・ガイドライン」についての概説	文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課	4
県教委・施策事業の紹介		
性の多様性を尊重した教育の推進について	教育局市町村支援部人権教育課 企画・支援担当 指導主事 田中 稔 浩	6
県立博物館・美術館等の博学連携の取組	県立歴史と民俗の博物館・県立さきたま史跡の博物館 県立嵐山史跡の博物館・県立自然の博物館・県立近代美術館 県立文書館・県立川の博物館・県教育局文化資源課	8
教育法規・情報		
教員の労働時間削減をどのように進めるか？ ～学校や個人で行える取組を考える～	明星大学教育学部 准教授 神 林 寿 幸	10
特集①確かな学力の育成		
確かな学力の育成に向けて ～「探究」と「協働」の視点で生徒一人一人の学びをつくる～	前 寄居町立男衾中学校 校長 現 北部教育事務所首席指導主事 市 川 篤 史	12
未来を創るトップリーダーを育てる「チーム大宮」	県立大宮高等学校 校長 鎌 田 勝 之	16
実践論文		
自ら課題を発見し、柔軟に考え、問題を解決する児童の育成を目指して ～算数科での考えを広げるICTを活用した授業展開～	富士見市立水谷東小学校 教諭 新 井 美 沙 枝	20
教師の「問い」がよりよい未来を考える児童を育成する	川口市立鳩ヶ谷小学校 主幹教諭 堀 祥 子	22
英語で自己表現できる生徒を育成する授業づくりの推進	新座市立第四中学校 教諭 印 南 佐 代	24
デジタル採点システムを用いた業務の削減と観点別評価の実践	県立岩槻商業高等学校 教諭 深 谷 遼 太	26
特集②働き方改革の実現に向けて		
ウェルビーイングな学校づくりから考えるワークライフバランスを考えた働き方 ～先生方が、笑顔で生き生きと自分の力を発揮して、幸せに働ける学校へ～	上尾市立平方北小学校 校長 中 島 晴 美	28
ペーパーレスへの挑戦 ～道のりと効果～	リコージャパン株式会社 埼玉支社 事業戦略部 プロモーショングループ 倉 持 梓	32
実践論文		
理科専科の実践 ～教科担任制の推進～	滑川町立月の輪小学校 教諭 橋 本 知 香	34
学校紹介		
志に生きる 「よさ」を認め「可能性」を伸ばす久喜中学校 ～よりよい社会の創り手を育てる久喜中版「令和の日本型教育」を目指して～	久喜市立久喜中学校 校長 木 村 信 之	36
「一人一人を大切に、専門性の高い、児童生徒・保護者・地域と共に生きる、開かれた信頼される学校」～毛呂山特別支援学校の取組～	県立毛呂山特別支援学校 校長 山 崎 仁 之	37
教職員からのメッセージ		
「魔法使い」のような養護教諭を目指して	川越市立初雁中学校 養護教諭 加 藤 百 香	38
管理職の魅力発信		
一つの輪	三郷市立幸房小学校 校長 中 西 健 二	39
教育長からのメッセージ		
「誰一人置き去りにしない教育を目指して」	飯能市教育委員会教育長 中 村 力	40
我がまち、こんなまち		
豊かな自然と歴史が息づくまち ぎょうだ	行田市総合政策部 広報広聴課 主事 上 杉 昌 平	41
子供たちに伝えたい埼玉の偉人		
狭山茶の輸出と三平蒸籠～増田三平の挑戦～	入間市博物館 学芸員 三 浦 久 美 子	42
校外学習施設紹介		
手軽に収穫体験や自然体験が楽しめる、丸々一日遊べる小松沢レジャー農園	小松沢レジャー農園 生産管理部 町 田 裕	43
シリーズ 改訂版 生徒指導提要		
第1回 生徒指導の重層的支援構造について	県立総合教育センター 指導相談担当主任指導主事 中 川 こ ず え	44
調査研究中間報告		
「校務効率化」を実現する校内組織マネジメントの向上に関する調査研究（中間報告）	県立総合教育センター企画調整担当・教育DX担当	45
研修の御案内		
多様なニーズに応える研修を用意しています！	県立総合教育センター	46
教職員相談道しるべ/次号予告		
教職員相談道しるべ 次号予告	県立総合教育センター 教職員研修担当 専門指導員 水 野 義 夫 県立総合教育センター 企画調整担当	47
コラム		
渋沢栄一の書	河 田 重 三	48

表紙	教師の「問い」がよりよい未来を考える児童を育成する	川口市立鳩ヶ谷小学校 主幹教諭 堀 祥 子
表紙見返し	令和5年度埼玉県立総合教育センター運営コンセプト	企画調整担当
裏表紙	五月蠅い夜	県立大宮光陵高等学校 2年 福 原 諒 一
裏表紙見返し	「君の幸」	県立川越南高等学校 2年 中 村 華 琉

令和5年度を迎えて ～ポストコロナにおける埼玉教育の更なる発展のために～

埼玉県教育委員会 教育長 高田 直芳



教育長に就任してから3年余りが経過し、私の教育長としての任期も残り一月となりました。そこで、これまでの3年間を振り返るとともに、本県教育の課題について整理し、今後の進むべき方向性について考えてみたいと思います。

1 ポストコロナ元年の学校教育の創造

コロナ禍が始まって間もない令和2年4月に着任して以来、3年間にわたって新型コロナウイルス感染症への対応に追われる日々を過ごしましたが、令和5年5月8日に感染症法上の位置付けが5類に移行したことに伴い、その対応に大きな区切りを迎えました。

コロナ禍で児童生徒には我慢を強いる学校生活を送らせてしまいましたが、児童生徒に少しでも充実した教育を届けようとそれぞれの学校で献身的に御尽力いただいた全ての教職員の皆さんに心から感謝を申し上げます。

いま、それぞれの学校では、光り輝く新緑の中でマスクを外して元気に活動する児童生徒の姿が見られることと思います。

授業の在りようがこの3年で一変したことは皆さんが実感されていることと思います。単にコロナ禍前に戻すのではなく、コロナ禍を経験したからこそその気づきを大切にして、新たな学校教育を皆さんで模索していただきたいと思います。

先般、中央教育審議会は「次期教育振興基本計画について(答申)」を取りまとめ、その中で今後の教育政策に関する5つの基本的な方針が掲げられました。

1つ目は「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」、2つ目は「誰一人取り残さず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」、3つ目は「地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進」、4つ目は「教育DXの推進」、そして5つ目は「計画の実効性確保のための基盤整備・対話」(下線部筆者)です。今後、国において正式に計画が策定されることとなりますが、いずれも今後5年間の国の教育政策の大きな柱になるものです。

本県においても、今年度中に第4期埼玉県教育振興基本計画を策定することになりますが、ポストコロナ元年の教育を創り出していくのは教職員の皆さんです。先ほどの5つの視点をそれぞれの学校の中でどう実現していくのかについて、ぜひ保護者や地域の方々も交えて、教職員の皆さんで対話していただきたいと思います。

2 解決すべき最重要課題

働き方改革の実現と不祥事の根絶については、就任以来、最

重要課題と位置付け、その解決に向けて取り組んできました。

「学校における働き方改革基本方針」の改定から2年目になりますが、時間外在校等時間が月45時間以内、年360時間以内の教員の割合を100%とする目標の達成には至っていません。また、国の勤務実態調査の速報値でも未だ改善には課題が多い状況です。

働き方改革を最重要課題と位置付けている理由は、もちろん子供たちにより良い教育を提供するためであり、そのためにも教員の勤務環境を整え、意欲溢れる若者が教育の世界に飛び込んでくれる状況を何としてもつくりなければなりません。

また、不祥事の根絶については、昨年度29件の懲戒処分のうち11件が免職であり、今年度に入ってから複数件の免職処分を行うなど、極めて憂慮すべき状況です。そのため、先日、「児童生徒はもとより、保護者をはじめとする県民の皆様からより一層信頼していただけるよう、県教育委員会を挙げて不祥事の根絶に努めていく」といった内容の教育長メッセージを発信したところです。不祥事の根絶に向けて、全ての教職員が不祥事を絶対に起こさないという強い決意と自分事として捉える当事者意識を持つことが非常に重要です。

結びに

社会の変化が予測困難な時代において、一人一人の豊かで幸せな人生と社会の持続的な発展を実現するために、教育の果たす役割はますます大きくなっています。

『未来を創る、こどもたち。未来を育てる、わたしたち。～未来への責任～』これは県教育委員会が策定した、教育に携わる職の「使命」や「誇り」に関するキャッチフレーズ「埼玉県教職員MOTTO(モットー)」です。私たち教職員は、「子供たちの未来を育てる」という崇高な使命を担っていることを深く自覚し、教育に対する県民の皆様の大きな期待に応えていく責務があります。

近年、EBPM(エビデンスに基づく政策立案)という言葉をよく聞くようになり、教育局でもこのことを意識した行政運営に努めています。

一方で、本来、教育は将来大きく花ひらくことを願って種を蒔いていく営みだとも言えます。3年余りにわたったコロナ禍を乗り越えて、ポストコロナ時代に大きく花ひらく埼玉教育の種を教職員の皆さんの手でたくさん蒔いてほしいと思います。

私も任期満了まで本県教育の充実発展のために全力で取り組んでまいりますので、引き続き、皆様の御支援・御協力をよろしくお願い申し上げます。

未来を創る子供たちの育成に向けて

県立総合教育センター 所長 田中 洋安



はじめに

令和5年4月1日付で県立総合教育センター所長に就任しました田中洋安です。これまで県立総合教育センター（以下、センター）に関係した皆様が脈々と築いてきたセンターの文化、伝統、強み、良いところを継承し、学び続ける「埼玉の教職員」と「学校の教育力向上」を支援する様々な取組を推進してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

いま、私たちは教育の一大転換期を目の当たりにしています。令和3年1月、中央教育審議会から「令和の日本型学校教育」の構築を目指した答申が出され、個別最適な学び・協働的な学びの実現、ICTの活用を中心としたGIGAスクール構想の取組、新学習指導要領の着実な実施など、様々な改革を進めることが求められています。

令和5年5月8日に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が5類になったことに伴い、各学校では、学習指導要領を踏まえた学習指導等の更なる改善・充実に取り組まれていることと思います。教職員の資質能力の向上・学校の教育力の向上という重要な使命を果たすため、センターでは、引き続き様々な事業を企画し、各学校（園）や市町村教育委員会をサポートしてまいります。

未来を育てる知の拠点

児童生徒の学び、教師の学びそのものが急激に変化・多様化する時代の流れに対応するため、令和4年度にセンターの目指すミッションを「未来を育てる知の拠点」に、ビジョンを「学び続ける教職員・学校の教育力向上を図る」としました。このことにより、センター3大事業のひとつである「研究・開発」事業の質を一層高める認識を全所員が深め、その成果を「研修」及び「教育相談」事業へ着実に連鎖させてまいります。令和4年7月の教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部改正（教員免許更新制の廃止）に伴い、「埼玉県 校長及び教員としての資質向上に関する指標」（以下、「指標」）を令和5年3月に策定しました。教職員のキャリアステージに応じた総合的・体系的な研修として、各年次研修の他、専門研修45本、特定研修17本を新指標に基づいて計画しております。教職員が研修を通じて資質能力の向上が図られるよう、学びの多く充実した研修の推進に努めてまいりますので、詳しくはセンターのホームページ掲載の「研修案内」を御覧ください。また、近年増加傾向にある「要請研修」にも専門性の高いセンター所員が、学校を訪問し各学校の教育課程に沿った教育活動を支援してまいりますので、御活用をお願いします。

江南支所においては、豊かな自然環境や充実した施設設備を活用し、スマート農業化に伴う農場でのICT活用に向け、調査研究に取り組んでまいります。

学びのネットワークの充実

グローバル化と多様性の時代にあつて教育の果たす役割は大きく重いものがあり、一機関だけで課題を解決することが難しい状況となっています。

センターでは国内の大学・研究機関64か所とネットワークを巡らせ、学びのレベルアップを図っています。国際協力機構（JICA 東京）の職員1名を国際協力推進員として配置し、SDGsの視点を取り入れた授業づくりや研修プログラムの開発などに取り組んでおります。センター内のJICA サテライト展示を含め、是非御活用ください。国立女性教育会館（NVEC）との男女共同参画に向けた取組等、今後も多くの教育研究機関と連携し、埼玉教育の充実に努めてまいります。

新しくなった「埼玉教育」

「埼玉教育」（以下、本誌）は、埼玉県内の教職員の優れた実践、役立つ教育活動を数多く掲載する「教職員のための教育情報誌」です。昭和23年度に前身の「ニュースクール」が発行されて以来、今年度で75周年となります。「埼玉県5か年計画～日本一暮らしやすい埼玉へ～」の教育分野では、「未来を創る子供たちの育成」が進むべき針路として掲げられておりますので、今年度から本誌のコンセプトを「未来を創る子供たちの育成に向けて」と改めました。また、センターのペーパーレスの一環として、本誌のデジタル化を図りました。県立図書館デジタルライブラリーよりダウンロードができ、教職員が自身の端末からいつでもどこでも閲覧できるようになっております。日々の教育実践を磨くための糧にいただければと思います。さらに、デジタル化したことで、広く県民の皆様にも御一読いただけることを期待しています。

結びに

人生100年時代を主体性と他者との協働により、たくましく心豊かに生きていける児童生徒を育成するため、センターは「未来を育てる知の拠点」をミッションに掲げ、今後も時代のニーズに対応し、学び続ける教職員・学校の教育力向上を図る有益な事業を企画し、各学校や市町村教育委員会の支援に日々鋭意努力してまいりますので、皆様の一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

「教師の資質向上に関する指針・ガイドライン」 についての概説

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課

指針・ガイドラインの策定までの流れ

令和3年3月、文部科学大臣は、中央教育審議会に対して、『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」と題する諮問をした。本諮問においてはICT環境の活用と少人数学級によるきめ細やかな指導体制の整備を両輪として進め、個別最適な学びと協働的な学びによる『令和の日本型学校教育』を実現するための、教職員の養成・採用・研修等の在り方の検討が求められた。中央教育審議会においては、教員育成指標や研修受講履歴等を手がかりとした教師と指導助言者との「対話」や研修の奨励が確実に行われるよう、各任命権者が、教師が教員研修計画に基づき研修を受けた履歴等を記録し、当該履歴を活用しながら、指導助言者が教師に計画的かつ効果的な資質の向上を図るための研修の受講を奨励することの義務づけを検討すべきとした。各任命権者はもとより、服務監督権者たる市町村教育委員会や学校管理職が、現場を預かる立場から、高い当事者意識と意欲を持って、これらの「対話」や研修の奨励の仕組みに参画していくことが重要と指摘した。

令和3年11月、教員の資質向上に関して、『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」（審議まとめ）が取りまとめられた。これを受け、教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律が、第208回国会において成立した。

この「教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律」により、「新たな教師の学びの姿」を実現する体制の構築に向けて、教育委員会における教師の研修履歴の記録の作成と当該履歴を活用した資質向上に関する指導助言等の仕組みが導入された。

また、本改正を受け、令和4年8月31日、公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針（以下、指針という。）を改正するとともに、研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励に関するガイドライン（以下、ガイドラインという。）を策定したところである。

公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針

改正された指針の中では、指導助言者と教員等が研修等に関する記録を活用しつつ、資質の向上に関する指導助言等と

して対話を重ねることが示されている。そして、今後能力を伸ばす必要がある分野の研修受講などの資質の向上方策について、教員等からの相談に応じ、情報を提供し、又は指導及び助言を行うことが必要とされている。この際、教員等が可視化された学習履歴を自ら振り返り、指導助言者と対話する中で、自らの強みや弱み、今後伸ばすべき能力、学校で果たすべき役割などを踏まえ、必要な学びを俯瞰的かつ客観的に理解することが重要であるとしている。

また、教員等の資質の向上を図るに当たって、校内研修や授業研究・保育研究などの「現場の経験」を重視した学びと研修実施者や様々な主体が行う校外研修とが最適な組合せにより実施されることが重要であり、実施に当たっては、対面・集合型で行われるもの、同時双方向型のオンラインで行われるもの、オンデマンド型のオンラインで行われるものなど、様々な実施方法が想定される。特に、近年の情報化の進展等により、オンラインによる研修が急速に広まっており、その利点を最大限に生かすとともに、主として知識伝達型の学びであるかどうか、協議やグループワーク形式により学びを深めるものであるかどうかなど、研修の内容・態様に応じて、これらの方法を適切に組み合わせる必要があるとした。

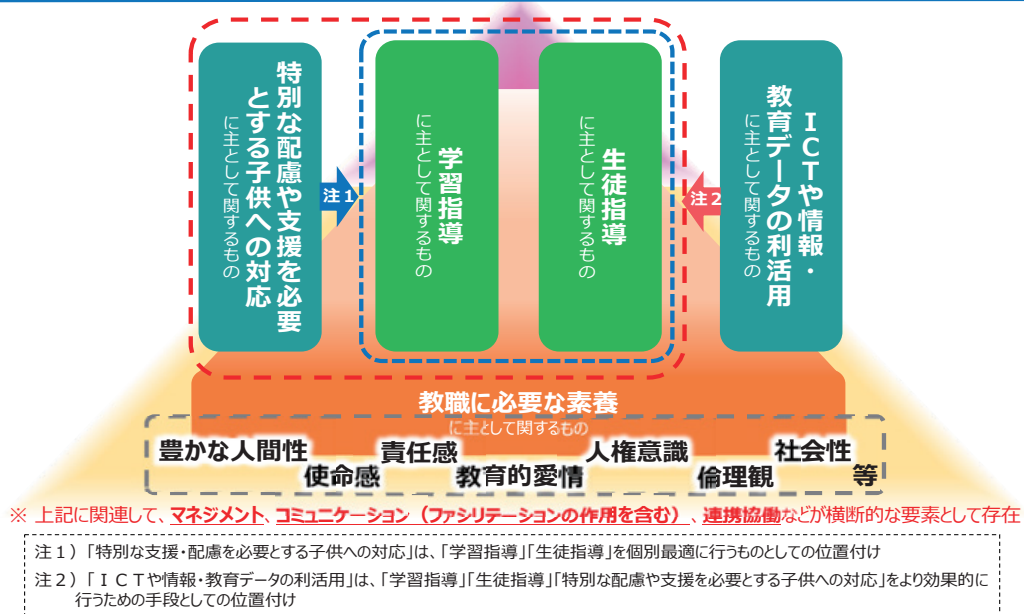
加えて、教師に共通的に求められる資質能力を、①教職に必要な素養、②学習指導、③生徒指導、④特別な配慮や支援を必要とする子供への対応、⑤ICTや情報・教育データの利活用の五つの柱で再整理するとともに、研修履歴を活用した資質向上に関する指導助言等について、その基本的な考え方を明記している。

研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励に関するガイドラインについて

本制度改正に関する基本的考え方を示した教育公務員特例法第22条の2第1項の指針に基づき、その具体的な内容や手続等の運用については、ガイドラインで定めている。

教育委員会においては、教師の包括的な人材育成の責任主体として、教員研修計画に基づき、体系的・計画的で持続的な資質向上の推進体制を整備することが求められる。その際、オンラインの活用も考慮しつつ、研修内容の重点化や精選なども含め、効果的・効率的な研修実施体制を整えることが重要である。また、所管する学校の教師に対し、大学・

公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針 に基づく教師に共通的に求められる資質能力の具体的内容



教職大学院等とも連携しつつ、地域の特色や実情を踏まえた研修を自ら企画・実施することや、研修主事などの校内における研修の中核的な役割を担う分掌の設置を含む校務分掌に係る規定の整備などにより、教師の資質向上に向けた支援体制を整えることが重要である。加えて、校内における教師同士の学び合いやチームとしての研修の推進は、教師の「主体的・対話的で深い学び」にも資することから、校長のリーダーシップの下での、全校的な学び合い文化の醸成や、そのための協働的な職場環境づくりが期待される。教師同士の学び合いは、校内だけでなく、学校を越えて行うことも考えられ、校長等の管理職や研修に関して中核的な役割を担う教師は、校内研修と関連させながら、教育委員会の指導主事、大学教員、民間企業等の専門家などの同じ職種ではない別の立場の者のような学校外部の者も交えた学びの機会を調整していくことが期待される。

研修履歴の記録は、指標や教員研修計画を踏まえて行う対話に基づく受講奨励において活用されることが基本である。これまで受けてきた研修履歴が可視化されることにより、無意識のうちに蓄積されてきた自らの学びを客観視した上で、さらに伸ばしていきたい分野・領域や新たに能力開発をしたい分野・領域を見出すことができ、主体的・自律的な目標設定やこれに基づくキャリア形成につながる事が期待される。

対話に基づく受講奨励は、教師と管理職とが対話を繰り返す中で、教師が自らの研修ニーズと、自分の強みや弱み、今後伸ばすべき力や学校で果たすべき役割などを踏まえながら、必要な学びを主体的に行っていくことが基本である。「新たな教師の学びの姿」が、変化の激しい

時代にあって、教師が探究心を持ちつつ、自律的に学ぶこと、主体的に学びをマネジメントしていくことが前提であることを踏まえ、対話に基づく受講奨励は、教師の意欲・主体性と調和したものとなるよう、当該教師の意向を十分にくみ取って行うことが望まれる。

終わりに

改正された指針では、所属する教師の人材育成に大きな責任と役割を担っている校長に求められる資質能力を明確化するとともに、校内研修の活性化、研修の性質にに応じて、研修後の成果確認方法を明確化することの重要性を示している。今後、教育委員会は、改正された指針を参照して指標を再度設定し、指標を踏まえた教員研修計画を改正することになる。

一人一人の教師が、自らの専門職性を高めていく営みであると自覚しながら、誇りを持って主体的に研修に打ち込むことができるという姿の実現を目指し、指導助言者との積極的な対話を踏まえながら、教育委員会が提供する学びの機会と、教師自らが主体的に求めていく多様な主体が提供する学びとが相まって、変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶ教師が育っていく。

また、教師の学びの内容の多様性と、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」も含む学びのスタイルの多様性を重視するということが重要である。教師の個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにもまた求められている命題であるといえる。

性の多様性を尊重した教育の推進について

教育局市町村支援部人権教育課 企画・支援担当 指導主事 田中としひろ 榎浩

1 はじめに

令和2年に県民生活部人権推進課（現：人権・男女共同参画課）が県内在住の18歳から64歳、15,000人を対象に行った調査では、有効回答数5,606件に対して184件（約3.3%）が性的マイノリティであるという結果が出た。

このような状況を踏まえ、埼玉県では令和4年7月に全ての県民が互いの人権を尊重しながら共に生きる社会の実現を目指し「埼玉県性の多様性を尊重した社会づくり条例」を制定した。

本条例の目的は、その第1条に示されている。

第1条（目的）

この条例は、男女という二つの枠組みではなく連続的かつ多様である性の在り方の尊重について、その緊要性に鑑み、性的指向及び性自認の多様性（以下「性の多様性」という。）を尊重した社会づくりに関し、基本理念を定め、県、県民及び事業者の責務を明らかにするとともに、性の多様性を尊重した社会づくりに関する施策の基本となる事項を定めることにより、性の多様性を尊重した社会づくりに関する取組を推進し、もって全ての人の人権が尊重される社会の実現に寄与することを目的とする。

2 学校における性の多様性を尊重した教育の実施

「埼玉県性の多様性を尊重した社会づくり条例」第3条で基本理念について示している。

第3条（基本理念）

2 性の多様性を尊重した社会づくりに当たっては、性の多様性に関する理解の増進、相談体制の整備及び暮らしやすい環境づくりに関する取組が行われなければならない。

性的マイノリティの割合が3.3%という前記の調査を学校にも当てはめると、学級に一人は性的マイノリティの児童生徒が存在することになる。つまり各学校では「自校にはいない」ではなく、「見えていないだけで、どの学校にもいるもの」と考え、性の多様性を尊重した教育を進めていく必要がある。

「埼玉県性の多様性を尊重した社会づくり条例」の第12条2項では、学校における啓発の取組について示されている。

第12条（啓発等）

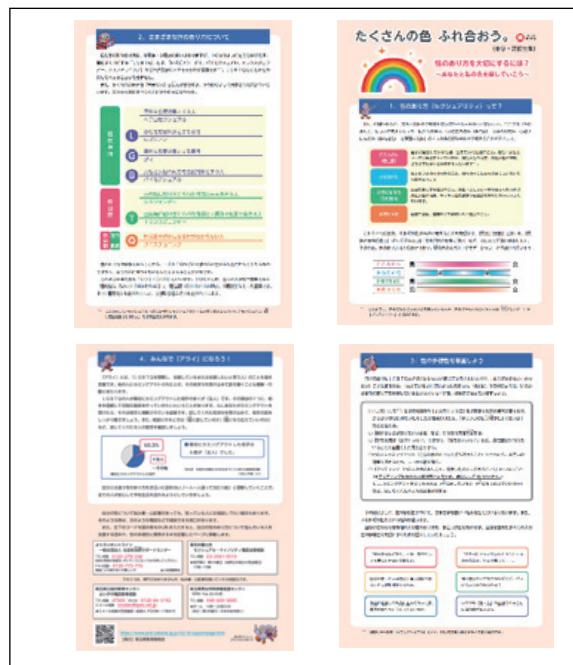
2 県は、学校の授業その他の教育活動において、性の多様性に関する理解を深めるため、学校の設置者と連携し、必要な施策を講ずるものとする。

全ての児童生徒が性の多様性に関する理解を深めるとともに、安心して学校生活を送ることができるようにするため、県教育委員会では性の多様性を尊重した教育を推進している。

3 県教育委員会の取組

(1) 理解の増進

ア 児童生徒用リーフレット



児童生徒が性の多様性について理解を深めるためには、まず児童生徒が手に取って見ることで理解できるような資料を作成することが必要であった。

そこで、令和3年度に児童生徒用リーフレット「たくさんの色 ふれ合おう。」（小学校5・6年生版、中学・高校生版）を作成した。

次に、教員が授業や指導の場面で児童生徒用リーフレットを活用することができるような資料を作成する必要があった。

そのため、令和4年度に教員が児童生徒用リーフレットを活用して授業を実施するための指導資料集を作成した。

イ 保護者向け動画



保護者が性の多様性について理解を深めるということは大切なことである。

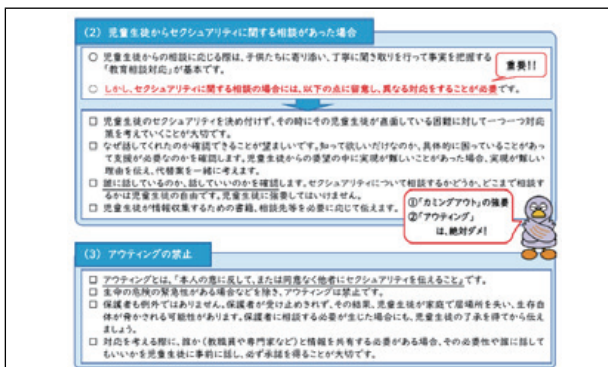
保護者自身が理解を深めることで、子供からLGBTQに関する相談を受けた際に適切な関わり方・対応ができるようになる。また、全ての児童生徒が安心して学校生活を送ることができる環境づくりにもつながることである。

そこで、令和4年度に保護者向け動画「LGBTQについてみんなで学ぼう」を作成した。6本で合計90分程度の内容となっている。各動画のタイトルは以下のとおりである。

- 1 LGBTQとは
- 2 理解者の必要性
- 3 多様性を尊重することの大切さ
- 4 安心感を生む環境づくり
- 5 もし子どもにカミングアウトされたら
- 6 カミングアウトをした子どもを受け止め、支えるために大切なこと

(2) 相談体制の整備

ア 教職員用リーフレット



学校（教職員）が児童生徒から性の多様性に関する相談を受けるということを想定した体制を整備しておくことは重要なことである。

令和2年度に教職員用リーフレット「ひとりひとりが自分らしく生きる」を作成した。性の多様性に関する基本的な内容、児童生徒への対応、具体的な取組例等が掲載されている資料である。

イ 相談対応

学校（教職員）が児童生徒からLGBTQに関する相談を受ける事例は少なく、当該児童生徒の悩みの解消が困難な事案も存在する。

学校（教職員）が児童生徒から相談を受けた際の活用を想定した性の多様性に係る相談対応ハンドブック（教職員用）を作成した。これは、フローチャートで対応の流れを示した上で、具体的な対応の場面についてQ&Aの形式にまとめた資料である。

また、児童生徒からの相談対応、配慮・支援に関して、専門的な助言等を必要とする県立学校に対し、外部専門機関から人材派遣等をして相談体制を充実する取組を行う。

さらに、性的指向・性自認の悩みを家庭や学校に打ち明けることが困難な高校生を対象として、オンライン上での交流会及び個別相談会を実施している。

(3) 環境づくり

児童生徒が安心して学校生活を送るためには、教職員の理解促進は必要不可欠であるが、それと同時に学校の環境が整備されていることは、自身の性に違和感を持っている児童生徒にとって重要なことである。

〈学校の環境づくりを進めるための観点（例）〉

- ・校内掲示や学校図書館を利用した、児童生徒に対する理解増進の取組
 - ・校内研修等、教職員に対する理解増進の取組
 - ・更衣室やトイレ等の学校環境の配慮方策 等
- 令和5年度には、人権教育課において、性の多様性配慮取組シートを作成する。

4 おわりに

児童生徒が性の多様性について理解を深め、お互いのセクシュアリティを尊重し合えること、また、学校が適切な相談対応、施設等の運用をすることが重要である。その上で、全ての児童生徒が安心して生活できる学校づくりを推進していきたい。

県立博物館・美術館等の博学連携の取組

県立歴史と民俗の博物館・県立さきたま史跡の博物館・県立嵐山史跡の博物館
 県立自然の博物館・県立近代美術館・県立文書館・県立川の博物館・県教育局文化資源課

はじめに

学校と博物館・美術館等とが連携して子供たちの学習効果を高める教育活動を「博学連携」と言います。平成29・30・31年改訂の学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たり、博物館・美術館等の施設を積極的に活用することが重要であると示されています。また、平成30年6月の文化財保護法の改正では、文化財の活用と保存の取組をより強固にすることが求められています。

博学連携は子供たちに対し「地域の歴史や文化に対する理解を深める」「伝統や文化を尊重する態度を育成する」「郷土に対する愛着をもつ」「将来の文化の担い手を育成する」といった高い教育効果が期待できます。

県立博物館・美術館等では、博学連携を推進するために、社会科見学等の館内学習の受入や学校へ出向いて授業の支援を行う等の学校支援を実施しています。本稿では各館の博学連携事例の一部を御紹介します。県立博物館・美術館等をどうぞ御利用ください。

県立歴史と民俗の博物館（さいたま市）

当館は「埼玉における人々のくらしと文化」をメインテーマとした常設展示のほか、季節展示や特別展示の見学、体験ゾーン「ゆめ・体験ひろば」では藍染め等の埼玉県の伝統的なものづくりが体験できます。

当館では学校支援事業として、展示見学や体験学習ができる校外学習の受入れ、体験活動中心の出前授業、資料の貸出し、教員研修等を行っています。校外学習、出前授業では昔の道具体験や土器観察の他、時代衣装の着体験も行っています。貸出し資料の昔の農具や生活道具は、社会科に限らず国語科や総合的な学習の時間にも活用されています。いつでも御相談ください。



【藍染めハンカチ作り】



詳しくはこちら



【時代衣装着体験】

県立さきたま史跡の博物館（行田市）

当館では小学校6年生、中学校1年生の社会科で学習する大和政権と地方の豪族とのつながりを表す国宝「金錯銘鉄剣」を展示しています。また、石室内の様子を調べたり、一部の古墳に登ったりできます。



【出前授業の様子】

実物資料から古墳時代を調べる授業やまが玉づくり等の体験の出前授業、オンラインで博物館とつなぐ授業も行っています。博物館の職員からより専門的な解説を受けることができます。

- ・なるほど！古墳時代 小6（他学年版もあり）
- ・オリジナルまが玉づくり 小4～小6
- ・オリジナルはにわづくり 小4～小6



【まが玉づくり体験】



詳しくはこちら

県立嵐山史跡の博物館（嵐山町）

当館では鎌倉幕府の御家人・畠山重忠ゆかりの品々や中世城館跡の出土品等を展示しており、実物資料で歴史を学び、体験することができます。また、当館は戦国時代の城跡に建っており、城跡見学もできます。



【もの運び体験】

さらに、小学校3年生が社会科で学習する「市の移り変わり」に対応した3種類の体験も提供しています。水や薪運びを体験する「もの運び」、米や茶葉を粉にする「石臼挽き」、ろうそくやランプのあかりを体験する「昔のあかり」を実施しています。



【石臼挽き体験】

体験用の道具は、貸出しもできません（「昔のあかり」を除く）。お問合せください。



詳しくはこちら

県立自然の博物館（長瀬町）

当館は県内唯一の自然系総合博物館です。

埼玉県地質（岩石、鉱物、化石）や生物（動物、植物）を展示しています。また、当館周辺の自然の解説や、学校や学校周辺での体験活動に職員が出向き、授業等を実施しています。小・中学校の理科や総合的な学習の時間、高等学校のSSHや総合的な探究の時間に活用されています。



【虎岩の解説】

●自然の解説

- ・岩畳、虎岩の解説等

●出前授業、体験活動

- ・土地のつくりと変化
- ・水生昆虫の観察
- ・動物のからだのつくり等



【動物のからだのつくり】



詳しくはこちら

※ 実施内容は学校の要望と調整しての対応が可能です。

県立近代美術館（さいたま市）

県立近代美術館の活用法

「作品をどうやってみればいいの？」

「子供たちの作品しか鑑賞したことがない…」そのような先生方にぜひ活用していただきたいです。



【授業協力の様子】

授業協力で作品を体験する

授業例 対象 / どの学年でも 授業時間 / 45-50分
「みて★座って！お気に入りの椅子を見つけよう！」当館収蔵のグッドデザインの椅子（本物！）を学校へお持ちし、目だけでなく座って作品について感じ、考えることで、作品鑑賞が初めての子供たちでも取り組みやすい活動となっています。

団体案内で本物の作品に出会う

案内例 対象 / どの学年でも 活動時間 / 要打合せ
校外学習や部活動等児童・生徒の実態に合わせて、美術館を楽しむ活動を提案します。

複製画を活用して先生の授業の一つにする

複製画だけでなく、複製パネルやアートカードなどもお貸出ししています。初めての先生にはレクチャーもいたします。



詳しくはこちら

県立文書館（さいたま市）

当館には明治時代以降の行政文書、埼玉県ゆかりの古文書や地図等、約86万点もの資料が収蔵されており、これらの埼玉県独自の資料を用いて次の学校支援を行っています。

- ①教員向け研修
- ②学校・教員の要望に沿った教材研究支援や授業提案
- ③学芸員と教員籍職員が連携し、専門的な内容に触れられる出前授業

授業の目的やねらいを踏まえ、児童生徒の学びがより深まるように、収蔵資料を活用した授業提案や出前授業を行っています。

◎令和4年度の出前授業の内容の一部

- ・洪水から人々を守る活動（戦後報道写真を活用・小4）
- ・開国と明治維新（重要文化財指定文書を活用・小6）
- ・戦時下の生活（協調学習で古文書を活用・高3）



詳しくはこちら



【資料の見方を高校生に伝える学芸員】



【デジタル化した収蔵資料を活用】

県立川の博物館（寄居町）

当館には日本一の屋外地形模型である「荒川大模型173」があります。この模型を使い、荒川の歴史や埼玉県の郷土について学ぶことができます。

また、当館は「川」に関する博物館であることから、小学校5年生の理科の単元「流れる水のはたらき」に関連した出前授業を数多く実施しています。

この授業では、学校の砂場を使い、砂山を作り、水を流しながら、川のはたらき（浸食・運搬・堆積）を知る「実験」の時間と、写真・映像資料を使用し、実際の川の様子を知る「まとめ」の時間の2時間構成で授業を実施しております。ぜひ当館を御活用ください。



【大模型解説の様子】



【実験の様子】



詳しくはこちら

教員の労働時間削減をどのように進めるか？ ～学校や個人で行える取組を考える～



明星大学教育学部 准教授 かんばやし 神林 としゆき 寿幸

前号で筆者は調査データの分析結果を踏まえて、教員の労働時間削減（時短）が必要な理由を考察した。その理由とは教員の心身双方の健康を保持増進すること、疾病出勤といった体調不良の状態での業務遂行を防ぐことであった。

教員の時短が必要であることが確認できたところで、次に浮かぶ問いは「どのようにしたら教員の時短は進むのか」というものであろう。本稿では先行研究及び筆者が携わった調査研究の成果をもとに、この問いに対する答えを提示したい。ここでは学校や個人で取り組むことができる「管理職による教員への支援」「援助要請」「タイムマネジメント」に着目する。今後時短を進める際の参考になれば幸いである。

着眼点1 管理職による教員への支援

はじめに、教員の時短に向けた取り組みとして、管理職による教員への支援に言及する。「管理職の支援が大切である」ということはあらためて言うまでもないことかもしれないが、実際に管理職の支援がある労働者ほどメンタルヘルスの状態がよいという傾向は国内外で確認されており¹⁾※、教員についても同様の結果が示されてきた（草海 2022 等）。ストレスチェックで管理職の支援の有無を質問されるのにはこうした背景がある。

そして、管理職からの支援は労働時間の減少にも有効であることを示唆する研究結果も報告されてきた。例えば、企業労働者を対象とした調査の分析では、上司が「業務量や重要な業務が特定の部下に偏らないように配慮している」「部下のキャリアおよびライフビジョンをよく理解したうえで、時間をかけて目標等を設定し業務を配分している」といった部下に支援的な上司の下で働く者の労働時間は短かった（武石 2012）。

教員についても企業労働者と同様の結果がこれまで報告されてきた。例えば、筆者が携わった公立小中学校教員を対象とした調査の分析によれば、「労働時間が過重にならないように業務量を調整している」「健康を気遣っている」「自宅での仕事を含めた実際の勤務時間を把握している」という管理職の下で勤務する公立小中学校教員では、校外での労働時間が短かった

（神林 2021）。

仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス：WLB）を追究する先行研究（武石 2012 等）は、WLBの実現には育児休業や短時間勤務制度等のフォーマルな制度の導入だけでは不十分で、制度を運用する職場のマネジメントの重要性を指摘してきた。筆者の分析（神林 2021）でも、先述のとおり、管理職からの支援による教員の時短を期待できる結果は得られた。しかし、タイムカード等で客観的に退勤時間管理を行っただけでは教員の時短は進まないことを示唆する結果も得られた。制度や施策の導入というのは時短への第一歩ではあるが、これらの仕組みが功を奏すかは各学校の管理職の采配によると言える。

着眼点2 援助要請をためらわないこと

次に指摘したいのが、援助要請をためらわないことの重要性である。援助要請とは、困り事が生じたときに周囲に助けや支援を求める行動のことである。着眼点1で言及した管理職からの支援というのは、苦しむ教員を管理職という他者が察知し助ける行為を指す。これに対して、援助要請とは自身の窮状を他者が察知する前に、苦しいことを他者に発信し気づいてもらう行動である。自分が苦しい状況に置かれていること、悩んでいることは他者に明確に伝えなければ伝わらない。このような経験がある読者の皆さんもきっといるであろう。窮状というのは場合によっては人命にもかかわるため、援助要請のスキルを高めることは臨床心理学等の領域で注目され、研究が進められてきた。

援助要請については、教員を対象とした研究もある。例えば、教員のメンタルヘルス悪化を防ぐために、援助要請のスキルが重要であることを示唆する結果がこれまで報告されてきた（田村・石隈 2001 等）。

こうした先行研究を踏まえて、筆者らはこの援助要請は教員業務の効率化にもつながるという仮説を立て、全国の教員を対象とした質問紙調査で検証した。検証したところ、「人に相談したり援助を求めたりするとき、いつも心苦しさを感ぜない」「相談・援助に心苦しさを感ぜない」という教員ほど、勤務日1日の労働時間が短かった（独立行政法人教職員支援機構編 2022、第7章）。援助要請をためらわない教員ほど労

働時間は短いという傾向が確認された。

以上を踏まえると、教員の時短を進めるためには、「周囲に助けを求めるのは恥だ」という想いを捨て、困ったときに堂々と周囲に助けを求めることが重要である。あわせて各教員が躊躇なく援助要請をするためには、風通しがよく寛容な職場づくりを進める必要があり、その際に管理職のリーダーシップも期待される。

着眼点3 タイムマネジメントを意識づけること

最後に、タイムマネジメントを意識づけることに注目したい。「タイムマネジメント」とは時間管理と訳され、「目標を達成するために時間を効果的に使用する行動」を意味し、これは仕事や学業、精神的健康に影響をもたらすことが実証されてきた（井邑ほか2016）。

タイムマネジメントの重要性については、教員の長時間労働が注目されるようになってから教員研修や関連書籍等で紹介されてきた。しかし、教員の時短に対するタイムマネジメントの有効性を支持する客観的根拠は乏しかった。

そこで、筆者らはタイムマネジメントスキルと教員の労働時間との関連について検証することにした。その結果、「時間を決めて課題に取り組む」「課題に取り組む際に小さな目標を立てる」ことができる教員ほど、勤務日1日の労働時間が短いという結果が得られた（独立行政法人教職員支援機構編 2022、第6章）。つまり、タイムマネジメントを意識づけられている教員は労働時間が短かった。

教育指導、授業準備、教材研究をはじめとして、教員の仕事には終わりが無い。各教員は自身の信念に基づいて自身の仕事を決め、究めようとするべくいくらでも究めることができる。そこに教員の仕事のやりがいや魅力があると同時に、一方で危険も潜む。児童生徒と向き合ったり、授業準備や教材研究に没頭したりするあまり、自身の健康のことを忘れてしまう。教員の長時間労働の怖いところである。

これは「おいしいけれども、身体に健康に悪いものをついつい食べすぎてしまう」という生活習慣病のメカニズムと類似すると筆者は考える。生活習慣病の進行を抑えるために食べ物をセーブするように、教員も時として自分で仕事を抑えることが求められる。この仕事をセルフコントロールする行為が、タイムマネジメントである。

また、医者介入により生活習慣病患者の健康は守られる。これを教員の仕事に当てはめて考えてみる。各教員の仕事を本人の主観のみだけでなく、客観的な観点からも把握し分析する。これによって、本人が自覚しにくい健康悪化のリスクを下げられるかもしれな

い。これら一連の行為もタイムマネジメントであり、中核的な役割を担うのは管理職である。タイムマネジメントとは教員の健康の保持増進と円滑な業務遂行に向けて本人と学校に期待される取り組みなのである。

【注】

^{1)※} アメリカ国立職業安全保健研究所は労働者にストレスをもたらす要因を体系的に整理した。この整理はNIOSH職業性ストレスモデルとして知られている。このモデルでは、過重労働等のストレスをもたらす要因がある場合でも、上司・同僚・家族からの支援が受けられるとストレスを軽減することができる（Hurrell & McLaney, 1988）。

引用文献

- 井邑智哉・高村真広・岡崎善弘・徳永智子（2016）「時間管理尺度の作成と時間管理が心理的ストレス反応に及ぼす影響の検討」『心理学研究』87（4）、374-383頁。
- 神林寿幸（2021）「公立小中学校教員の生活満足度を規定する要因」『日本労働研究雑誌』（730）、81-93頁。
- 草海由香里（2022）『教師のメンタルヘルスの維持・向上とリーダーとしての校長の役割』福村出版。
- 武石恵美子（2012）「ワーク・ライフ・バランスを実現する職場マネジメント」武石恵美子編著『国際比較の視点から日本のワーク・ライフ・バランスを考える一働き方改革の実現と政策課題』ミネルヴァ書房、147-182頁。
- 田村修一・石隈利紀（2001）「指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究」『教育心理学研究』49（4）、438-448頁。
- 独立行政法人教職員支援機構編（2022）『学校管理職として知っておきたい教員の働き方思考』（令和3年度学校運営の行動変容を促進する要因の解明に関する調査研究プロジェクト報告書）。
- Hurrell, J. J., & McLaney, M. A. (1988). Exposure to job stress: A new psychometric instrument. *Scandinavian Journal of Work, Environment & Health*, 14(Suppl 1), 27-28.

確かな学力の育成に向けて

～「探究」と「協働」の視点で生徒一人一人の学びをつくる～

本校では、令和4年度より国立教育政策研究所の教育課程実践検証協力校として総合的な学習の時間を中心に「探究と協働」の視点での授業づくりに取り組みながら学力向上を図っている。具体的な実践とともに紹介していきたい。

前 寄居町立男衾中学校 校長 市川 篤史
(現 北部教育事務所主席指導主事)



1 はじめに

前任校である男衾中学校は、埼玉県北部の寄居町にある中学校である。生徒数は年々減少傾向で、昨年度の生徒数は213名、学級数は8学級と規模の小さい学校であるが、昭和22年の開校以来、これまで8千人を超える卒業生を輩出してきた。その中には、東京オリンピック2020で金メダル、銀メダルを獲得した柔道の新井千鶴さんや、東京マラソンで日本記録を出した設楽悠太さんなど、各界で活躍する卒業生も数多くいる。

学校教育目標である『真の学ぶ力を身につけ たくましく生きる生徒の育成』のもと、「自ら学ぶ生徒」・「心豊かな生徒」・「たくましい生徒」の育成を目指し、全教職員が一丸となって日々教育活動に取り組んでいる。

ここでは学力向上の取組の一つを紹介したい。

2 研究主題設定の理由

子供は元来、知的好奇心が旺盛で、自ら対象（人・もの・こと）と関わろうとする。そして、その関わりから、子供は、心が動かされ、「～したい」という言葉を発する。その言葉から始まるのが、「探究」の学びである。子供たちから生まれた各々の「なぜ?」という問いを大切に、本校の教員がもつ一人一人の専門性や持ち味を生かし、「協働」させながら、子供たちがたっぷりと学びにひたる時間を設け、取り組むこととした。※表記の「子供」は一般論としての子供の実態

生徒たちの学びが「やってみたい、知りたい、解明したい」などの知的好奇心とつながっていれば、より専門的な知識や技能の習得にチャレンジできるのが中学校での総合的な学習の時間の長である。そして、そこで身に付けた知識や技能というのは、それぞれの教科等と往還するので、生きて働くようになる。

さらに、生徒たちは、探究的な見方・考え方を駆

使しながら、この時間を通じて、“試行錯誤する”“とことん追究する”“じっくり創る”などを体験することができる。その経験は、やがて高校や大学等へ進学した後や、社会人になった後でも生き続け、生涯学び続ける人として、人生を豊かにするものと考えられる。

3 学力向上としての総合的な学習の時間

平成30年、文部科学省教育課程部会から下図にあるような成果が示された。また、全国学力・学習状況調査等でも、「総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる児童・生徒ほど教科の平均正答率が高い」という結果も出ている。学力向上に大きな成果を期待することができるのが総合的な学習の時間であるが、一方で課題もある。加えて3年前からのコロナ禍により、様々な制限もあって、本来の総合的な学習の時間の取組ができなかったという状況もあることから、改めて課題（図中の下線部(1)～(4)）の解決を図り、学力向上につなげたいという思いから取組をスタートさせた。

【総合的な学習の時間の成果と課題（一部抜粋）】

平成30年10月1日 文部科学省教育課程部会

成果

- ・総合的な学習の時間の取組が、知識及び技能の定着と思考力・判断力・表現力等の育成の両方につながっている
- ・総合的な学習の時間の取組が、各教科等における探究的な学習の根幹になっている
- ・総合的な学習の時間は、PISA調査(OECD)の好成績につながったと国際的にも高く評価 など

課題

- (1)学校により指導方法の工夫や校内体制の整備等に格差がある
- (2)社会に開かれた教育課程の実現に向け、実社会・実生活にかかる課題をより積極的に取り扱うことが必要
- (3)探究のプロセスの中で「整理・分析」、「まとめ・表現」に対する取組が不十分である
- (4)総合的な学習の時間と各教科等との関連が不十分な学校がある など

(1) 指導方法の工夫と校内体制の整備

総合的な学習の時間の指導方法が個々の教師任せになっていたり、学校全体で取り組む体制が整っていなかったりしていたことから、本校では、次のことについて、改善を図った。

① 学年・学級の枠を外した学習集団

小規模校の特長を生かし、令和4年度から全学年で総合の時間割をそろえ、学年・学級の枠を外した（いわゆる縦割りによる）学習集団を形成し、総合的な学習の時間『一斉総合』の授業（年間35時間）を始めた。年度当初にアンケートで生徒の思いや考えを聞き取り、それらを整理し、まとめ、次の七つの領域（ゼミ）を開設した。



防災・防犯

福祉・ボランティア

歴史・地理

食・特産物

広報・観光

まちづくり

自然・環境



② 時数の確保

毎週水曜日の5・6校時を全学年共通での総合的な学習の時間とした。以下の表にあるように、従来型の総合的な学習の時間や1年生の音楽・美術の時間も確保できるようにした。

【表 毎週水曜日5・6校時の内訳】

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
週	2	3	4	2	4	4	4	3	3	4	2	
	11週			15週				9週				
2・3 年学年総合 (従来型)	4	4	4	2	2	2	2	4	3	4	4	計 35
1～3 年一斉総合 (ゼミ方式)		2	3	2	6	6	6				4	計 35
1 年学年総合 (従来型)	2	2	2				2	4	1	2		計 15
1 年音楽	2	2	2	2	2	2			2	2	4	計 20

③ 年間の流れと共通の指導事項

一斉総合（ゼミによる活動）では、それぞれのゼミが主体となり、年間の計画を立てて進めていくこととしたが、授業の質を保つために、共通の指導事項4点について、年度当初に全教職員で確認した。

【縦割りによる一斉総合の年間の流れ】

	生徒	教員
4月～5月	ゼミ開設に向けてのガイダンス	職員会議で一斉総合の共通理解
	アンケートの実施	アンケートの結果から、七つのゼミを開設。教員を振り分ける。
6月～7月	縦割りグループ決定・探究活動開始	
	探究課題の決定・年間計画の作成	
9月～12月	縦割りグループでの探究活動・中間報告	
1月～3月	縦割りグループでの探究活動・最終報告	

【ゼミ共通の指導事項（留意点）】

- ・生徒たち一人一人の「なぜ？」や「～したい」を大切にすること
- ・地域や実社会の「人・もの・こと」とのかかわりを大切にすること
- ・協働を通して、互いをより深く理解していくこと
- ・友達や担当の教職員と振り返りを行う中で、学びの軌道修正をしたり、何を学んだかを確認したりしながら次に進んでいくこと

(2) 探究課題の設定

社会に開かれた教育課程の実現に向け、実社会・実生活にかかる課題をより積極的に取り扱うことが求められていることから、各ゼミとも、学区（男衾地区）や寄居町に関わる「人・もの・こと」を学習対象とし、それらを多様な学習活動を通して探っていくために、以下のような探究課題を設定した。

男衾中の生徒が創りたい寄居のまち	
防災・防犯	安心・安全で住みやすい町にするための取組とそれに関わる人々
福祉・ボランティア	誰にとっても住みよい福祉・クリーンな町と未来の寄居
歴史・地理	歴史と特産物・地域にかかわる人々
食・特産物	特産物と町の発展
広報・観光	生活の豊かさと自然、寄居の魅力発信
まちづくり	寄居町の再開発から学ぶ中学生のまちづくり
自然・環境	身近にある自然環境と豊かな生態系の創造

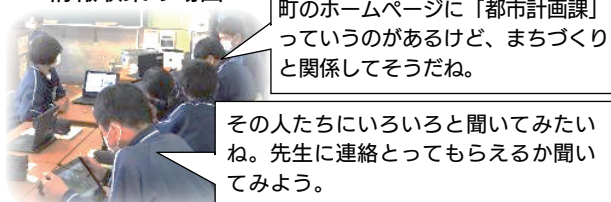
(3) 探究のプロセスの充実

本校では、探究のプロセスの中で、生徒が自分の考えを整理して、それをもとに分析し、分かりやすくまとめ、発表する取組に力点を置いた。また、探究のプロセスは、協働的な学びにより充実が図られることと捉え、一体的に取り組んだ。

①「探究」の視点（まちづくりゼミを例に）

自分たちで情報収集していく過程で、自分たちだけでは収集していく情報に限界があると感じる場面があった。そこで、どこの誰がどのような情報を持っているのかを調べ、その方にゲストティーチャーとして来てもらえるように生徒たちが授業を組み立てていった。そして、そこで得られた情報をもとに、今後自分たちが探究していきたいことを話し合い、整理・分析しながら方向性を明確にした。

・情報収集の場面



・ゲストティーチャーから話を聞く場面

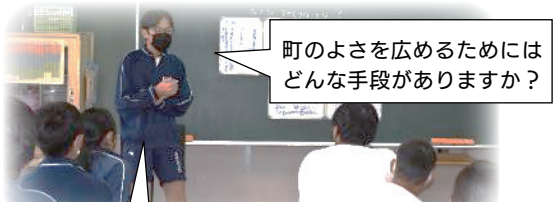


寄居町を楽しむことがまちづくりにつながります。



寄居町のことをいろいろと知ることができました。知らないことが多かったので、広めていきたいと思いました。

・方向性を明確にする場面（整理・分析）



町のよさを広めるためにはどんな手段がありますか？

都市計画課の人たちが持ってきてくれたパンフレットのようなのを、自分たちでも作るのも面白そう。

【生徒の変容】

「まちづくり」をテーマとし、実社会や実生活と結び付けながら取り組んでいるゼミでは、情報収集を進めている中で、生徒たちから「まちづくりに詳しい人に話を聞きたい」という意見が出てきた。その後、町の『都市計画課』の人をゲストティーチャーとして招いた。その人の話の中で「寄居町を楽しむことがまちづくりにつながる」というフレーズに生徒たちは心を揺さぶられた。「町のよさを知ること・広めることが自分たちにもできるまちづくりだ」と話し合いを通じて生徒たちは結論付けた。はじめは、「自分たちにもできるまちづくりなんてあるのか」と不安な様子だったが、自分たちで解決の糸口を見つけ、方向性を見いだしたことにより、その後の活動も生徒主体のより探究的な活動に変化していき、社会参画への意識も高まった。また、容易に解決されないような複雑な問題を探究し、物事の本質を見極めようとする生徒の姿も見られるようになった。

【教師の変容】

ゼミを担当している教員は、生徒一人一人が持つ本来の力を引き出し、伸ばすように支援することを意識するようになった。生徒の主体性が発揮されている場面では、生徒が自ら変容していく姿を見守り、逆に学習活動が停滞したり迷ったりしている場面では、積極的に関わるようにした。

②「協働」の視点（校内報告会の実施）

七つのゼミで活動を行っている関係上、他のゼミの取組を知る機会が少なかった。そこで、今まで取り組んできたことなどを校内報告会として発表できる場を設定した。発表の方法も、掲示物を作成したり、プレゼンソフトを活用したりと、各ゼミで考えるようにした。他のゼミの取組を知ることで今後の活動の参考にし、より探究的な活動へとつなげていくことができた。

【生徒の変容】

各ゼミが共通としている「ふるさとである男衾地区や寄居町」に係る「人・もの・こと」についての探究が、アプローチは異なっても、方向性や最終的なゴールは同じということを再認識することができた。また、異学年で取り組むことで、下級生は、上級生の経験知、課題に対する考え方、社会的スキルなど、目の前で感じながら吸収しようとする姿が見られた。上級生も下級生を前により質の高い探究を進めようとして取り組んでいて、相乗効果が見られた。

【教師の変容】

ゼミを担当している教員は、生徒が多様な情報を活用し、自分と異なる視点からも考え、力を合わせたり交流したりして学べるように、支持的に働きかけた。そして、協働的に学ぶことを通じて個人の学習の質を高め、同時に集団の学習の質も高めていくことができるように、学年の発達の段階に応じた指導や援助に努めていた。

(4) 総合的な学習の時間と各教科等との関連

本校では、異学年が混在した学習集団で取り組んでいることから、総合的な学習の時間と各教科等との関連をより明確にする必要が出てきた。各教科等における資質・能力に係る内容を把握した中で指導に当たることができるように整理した。

例えば国語科の思考力・判断力・表現力等の内容（話すこと・聞くこと）との関連については、総合的な学習の時間の中での話し合いや発表等の場面でそれぞれの学年に応じた見取りの視点を設定した。

生徒が話し合いを効果的に進める	
第1学年	話題や展開を捉えながら話し合う
第2学年	互いの立場や考えを尊重しながら話し合う
第3学年	進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合う

生徒が考えを形成する	
第1学年	互いの発言を結び付けて考えをまとめたり、広げたり、深めたりする
第2学年	結論を導くために考えをまとめたり、広げたり、深めたりする
第3学年	合意形成に向けて考えをまとめたり、広げたり、深めたりする

4 研究の成果

○ゼミ学習の最終日（35時間）の後に本校の3年生を対象に「総合的な学習の時間において身に付く資質・能力は何か」という質問をしたところ、次のようなことが挙げられた。

- ・問題発見力 ・思考力 ・コミュニケーション能力
- ・新しいことにチャレンジする力 ・調べてまとめる力
- ・どんどんよくするために改善していく行動力
- ・身の回りの問題や課題を見直して、それをどのように改善していくかを考えていく力 等々

これらはすべて生徒たちの言葉であるが、注目したいのは、「改善していく」という表現が度々使われていることである。生徒たちは、探究のプロセスの中では試行錯誤の連続であった。「よりよくしたい」

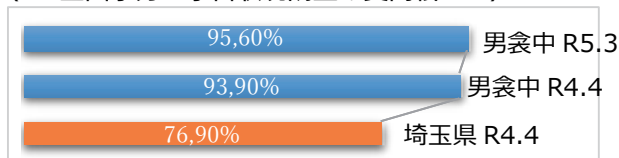
という向上心と、生徒自身が主体的に問題や課題を発見し、その解決に向け取り組むことができたという実感からくる表現だと捉えた。

○次に、「ゼミ学習のよさは何か」という問いに対しても、生徒たちから多様な考えが挙げられた。

- ・社会的な対人関係を学ぶことができる。
- ・まわりの人の意見を生かすことができる。
- ・学年が違う人同士で関わることで様々な意見が出て、そういう意見もあるんだということを実感できる。
- ・普段かかわることがない他学年の人たちと集団で行動することのよさを実感できる。
- ・ゼミを通じて同じ場所でやってみたいことを他の学年のみんなと考えるので、関心や向上心を高めることができる。
- ・様々な意見を聞き、それぞれのよいところを組み合わせ、さらによいものができる。
- ・周りの人の意見を自分の意見とうまく組み合わせるにはどうすればよいのかななどを考えることができる。

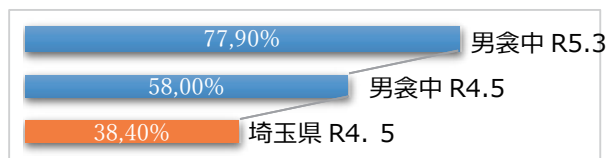
ここでは、特に異学年、異学級の仲間と取り組むことのよさが見えてきた。より質の高い探究は協働によって生み出されることが、生徒の振り返りからも明らかになってきた。あらためて「探究」と「協働」を一体的に捉える必要性を感じた。

自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか？
(R4 全国学力・学習状況調査の質問紙から)



今住んでいる埼玉県や寄居町の歴史や自然に関心を持っていますか？

(R4 埼玉県学力・学習状況調査の質問紙から)



5 おわりに

異学年で構成したゼミによる取組を通じ、生徒同士が、学年、学級の壁を越えて関係が良好になっていくのを目の当たりにした。教職員も、情報交換・実践交流が行われ、そのことが生徒一人一人のよさを見つけ、伸ばしていくことにつながると感じた。取組に手応えを感じるとともに、確かな学力を育成していく上で総合的な学習の時間の重要性を改めて認識することができた。



男子校章



女子校章

未来を創るトップリーダーを育てる 「チーム大宮」



県立大宮高等学校 校長 鎌田 勝之

1 はじめに

JR さいたま新都心駅を降り、COCOON CITY (片倉工業株式会社が所有する商業施設) を抜け、住宅街に入るとすぐの場所に埼玉県立大宮高等学校はある。さいたま市立大宮南中学校と隣接しているので、時々来校者が間違っって南中学校に入ってしまったという話もうかがう。大宮高校は、令和5年度に創立97年目を迎え、普通科8クラス、理数科1クラス、一学年360名規模の男女共学の進学校である。私は、1998年(平成10年)から8年間、英語科教諭として勤務し、2022年(令和4年)に校長として二度目の着任をした。大宮高校の歴史も交えながら、令和4年度の大宮高校の教育活動をお伝えしたい。



【正門から見た北校舎 (R4 大規模改修終了)】

2 私立学校から始まった大宮高校

埼玉県立大宮高等学校は、昭和2年創立の成均学園高等女学校から繋がる埼玉県大宮女子高等学校と、昭和4年創立の大宮農園学校から繋がる埼玉県大宮第一高等学校が昭和26年に統合したことに始まる。成均学園高等女学校は、当時の大宮町長小口慎太郎氏ご自身の土地を提供し設立をすすめた私立の女子校であり、大宮農園学校は後に片倉学園となり、片倉工業株式会社の取締役で大宮市初代市長となった今井五六氏の尽力によって発展していった学校である。いわば、大宮高校は、商業の街大宮市にあって、浦和市に依存していた大宮市の高校教育を向上させる役目を担った私立の女子校と男子校が県立移管を経て一つになった

学校と言える。この大宮高校創設の歴史的背景は、明治時代に創設され今も埼玉県の高校教育を牽引している浦和高校や浦和第一女子高校とは異なり、現在の大宮高校の校風や気質にも少なからず影響を与えていると思う。



【今井五六氏像 (やまぼうし会館)】

3 スポーツ強豪校から進学校へ、そして現在へ

昭和30年代から40年代初めの大宮高校は、スポーツが盛んな高校であった。野球部は春夏計7回甲子園出場、国体にも4回出場し昭和42年には優勝している。女子バレー部も全国大会で準優勝し、東洋の魔女と称された昭和39年東京オリンピック金メダリストの一人も本校の卒業生である。女子校と男子校が一つになり、スポーツで学校を盛り上げようとした当時の先生方の勢いを感じる。昭和50年代後半になると国公立進学者が100名を越え、進学校の色合いが強くなっていく。県立高校や私立高校も増え、現在はスポーツでの全国制覇は厳しくなっているが、本校の「立志」「文武両道」「自主自律」の校訓は継承されている。

平成に入ると理数科設置等の新たな取組が行われ、さいたま新都心駅も開業し(H12)、現在の大宮高校の姿が形成されていく。

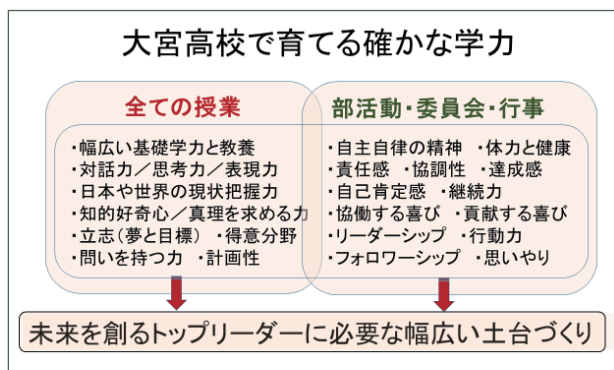
平成から始まった主な取組

- H3 理数科1学級の設置
- H8 ルドヴィッヒ・ライヒハート高校 (ドイツ) との姉妹校提携
- H13 65分授業の導入
- H15 2学期制の導入
- H17 スーパーサイエンス・ハイスクール指定 (～H23)
- H18 隔週土曜授業 (年間17回) の実施
- H23 完全共学化 (全てのクラスが共学に)
- H28 卒業生による母校支援「大高人」発足

平成10年4月に大宮高校に着任し、英語科準備室に入るなり、ベテラン教諭にこう言われた。「浦和市には、浦高、一女、市立浦和、浦西等、進学に力を入れた学校がたくさんある。大宮市に大宮高校ありと言われるようにならなくてはだめだ。」さいたま市となる前の話である。当時の大高生（おおこうせい）も優秀で誠実な生徒が多かったが、ナンバースクールではない大宮高校の教育力を向上させ、生徒たちをもっと伸ばしたいという教職員の熱意を強く感じた。令和4年4月に校長として二度目の着任をした。十数年の間に、大宮高校には、「チーム大宮」の精神が醸成されていた。「チーム大宮」の精神とは、一言で言えば「学び合い」の精神である。高いレベルの生徒同士が学び合い互いを高め合うことはもちろんのこと、教職員も生徒と共に学び合い高め合い、保護者や卒業生などの協力も得ながら共に成長していく精神だと認識している。授業でも部活動でも学校行事でも互いに学び合う姿勢で取り組んでいるということである。かつて「受験は団体戦」と謳い、学年皆で進路実現を目指そうとする姿は、日常から互いを高めあう姿に進化していた。大高生たちは大宮高校での生活を「楽ではないが楽しい大高生活」と称している。

4 大宮高校で育てる確かな学力（目指す学校像）

本校の目指す学校像は、「勉強と部活動等の両立の実践と自主自立の精神の涵養により、高い志と強い使命感を持った未来を創るトップリーダーを育てる学校」である。トップリーダーとは、経済界でいうところの企業のトップという意味ではなく、様々な分野で活躍する未来創りを担う人材ということである。



5 令和4年度の教育活動

(1) 学び合う65分授業

本校の授業は、「教員と生徒の真剣な学び合い」と言える。授業者が65分間ずっと解説して終わる授業はまずない。「はい、自動運転車に乗りたいか

どうかペアで話し合って、1分」「プラスミドを入れた時の色が緑色にならないのは何故？隣と話し合って」などと授業者が伝えるや否や、生徒は向かい合い対話が始まる。隣の生徒が不在だとすぐさま3人組ができる。「じゃあ何人か発表して？」と言うと生徒の手が挙がる。「その意見に何か反論は？」「じゃあその考えの根拠をもう少し説明して」などのやり取りが全ての教科で行われている。

数学Ⅲのある授業風景を紹介する。指名されていた生徒が大学入試過去問題を黒板に解答する。（解答をプロジェクタで投影する場合もある）その間、他の生徒は、自分の解答をまわりと確認している。板書が終わると生徒自ら解法を解説し、授業者や他の生徒は解答者に質問し、解法の考え方の議論が始まる。授業者は、全生徒に理解の確認を行うべく、解答に至るまでの考え方の理由、気づくべき視点、別の考え方等を質問していく。まさに授業者と生徒とでつくる授業である。

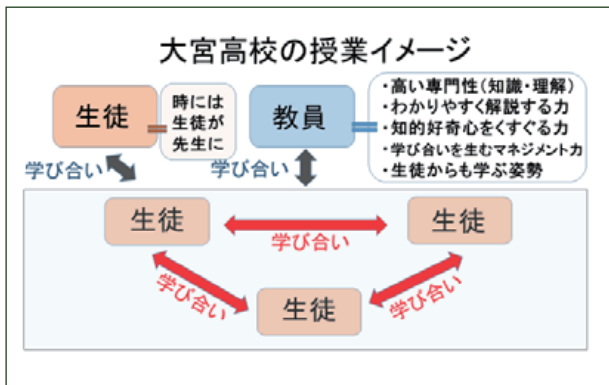
保健体育、英語等ではグループでテーマを決めた発表学習が日常的に行われているし、理科系科目では教科書に書いてある法則や原理を深く学ぶための実験を可能な限り準備し、社会科系科目ではビジュアルエイドをふんだんに活用し、現在未来に人類が抱える問題解決につながる総合的な力を身につけさせる授業が展開される。時代とともに移り変わることばとその心や思想を学ぶ古典、英語の4技能を全て取り入れた英語、感性を磨く芸術（音楽・美術・書道）、衣食住の基本を学び現代の課題を意識化させる家庭、プログラミング、データサイエンスを学ぶ情報、リーダーシップを育む競技選択制の体育など、全ての授業で質の高い授業が実践されている。

教員と生徒が学び合う質の高い授業を実践するために、教科内で教材を共同開発したり、教員相互の授業参観を頻繁に実施したり、生徒の質問には分かるまで解説したり、小論文の添削指導を行ったり、



【面談や生徒からの質問への解説が日々行われる職員室等の廊下に並ぶ机】

り、教職員の日々の惜しみない努力があって実現していることも申し添えたい。



(2) 加入率 97% の部活動

運動部 18 と文化部 21 の部活動があり、兼部を含め 97% の生徒が加入している。「最小時間で最大効率」を心がけ、練習の効率化を図り、顧問・生徒が創意工夫してオリジナルな練習方法を構築しながら活動している。練習内容を顧問に相談しながら生徒たちが主体的に決めていく部活動が多く、リーダーシップを育む場ともなっている。部活動は、学習意欲の向上、責任感や連帯感の涵養に資するものであり、自己肯定感や達成感を育む重要な教育活動だと考える。

令和 4 年度の主な活動実績

陸上競技部	女子 1500m 関東大会優勝 男子 200m インターハイ出場
硬式テニス部	女子 関東公立高校テニス選手権大会 3 位
ボート部	関東高等学校ボート大会出場
英語部	全国高校生英語ディベート大会 3 位
棋道部	全国高校囲碁選手権大会出場
音楽部	関東合唱コンクール銀賞

部活動の実績紹介となると全国大会や関東大会出場といった華やかな成績ばかりを披露しがちになってしまうが、久しぶりに県大会に出場した女子バレー部、南部地区大会で優勝したラグビー部等々、多くの部活動が、限られた練習時間の中で成果をあげている。顧問の指導のもと多くの大高生が部活動に励む姿は、生徒の人間形成にとって大切な時間であり、大宮高校の活力にもなっている。

(3) リーダーシップを学ぶ学校行事

令和 4 年度はコロナ禍で悩みながらも、工夫をしながら行事を実施することができた。1 年生は、GW 前に「オリエンテーションキャンプ」を 2 日間校内で実施した。クラス対抗の長縄跳び選手権や校歌合戦、リーダー論の議論・発表などを行い、学び合う基本を経験した。1 年生が大高生になる貴重な学びの

場である。

6 月には体育祭を実施した。体育祭実行委員会が中心となり放送委員会や各部活動が協力して実施する体育祭は、1 年生から 3 年生まで縦割りで九つの団に分かれ、3 年生がリーダーシップを発揮するよい機会となる。昨年度は応援等の制限もあったので、今年度以降に期待したい。9 月には、文化祭実行委員会が中心となり「No More 青春泥棒」をスローガンに掲げた大高祭を実施した。一般公開に踏み切り、土日の午前午後で四つの時間帯に分け、各 1500 人の入場制限を設け、全ての時間帯で定員が埋まった。3 年生は、初めて最後の大高祭となったが、準備段階から生き生きと活動し、先生方はそれを笑顔で見守り、当日は「おもてなしの精神」でキャストに徹して部活動やクラスのイベントを実施した。10 月、2 学年が沖縄への修学旅行を実施した。沖縄が抱える課題を地元大学生から学び、事前学習で沖縄について調べたことをもとにテーマを決めて討論する決勝戦も現地で実施した。

これらの行事を通して、大高生として総合的な人間力を身につけていく。コロナ禍は、学校行事の教育的意味を改めて教えてくれた。

(4) 学校外での学びとチャレンジ

生徒が自主的に挑戦する場も数多く提供している。科学オリンピックは、物理部、生物部、化学研究部に所属している生徒や教員に勧められた生徒が自主的にチャレンジし、7 部門すべてで全国大会進出をはたしている。令和 4 年度は 3 年生が国際物理オリンピックの日本代表となり、参加者上位 25% に授与される銀賞を受賞した。日本代表生徒 5 名は互いに刺激し合い、東大でまた会おうと約束したそうである。その生徒は、この春東京大学理科三類に進学した。また、2 年生がチャレンジした科学の甲子園では、埼玉県予選で優勝し、全国大会に出場した。全国の壁は高く涙をのんだが、この経験は生徒たちの自信と誇りになり、今後、より高い目標に挑戦するに違いない。

学校外での多様な学び・チャレンジ

科学オリンピック (化学 生物学 物理 地学 科学地理 情報 数学)	科学の甲子園 (JST 主催)
研究施設訪問 (東京大学 KEK 理研)	ドイツ姉妹校ライハート高校との交流 (隔年で派遣と受入れを実施)
グローバルリーダー育成プロジェクト (県教委主催のシンガポール派遣)	グローバル探究活動 (海士町での活動他)
スポGOMI甲子園 (日本財団主催)	エンパワーメントプログラム (ISA 主催の英語による討論・学び合い)

国際理解教育に目を向ければ、埼玉県教育委員会が主催する「グローバルリーダー育成プロジェクト」の県内30名のメンバーに、大高生4名が選抜され、模擬国連などの濃密な事前研修を経て、シンガポールに派遣された。3月に全校生徒に行った報告会では、4名の生徒が世界の現状と俯瞰して見えてきた日本の課題等を真剣に語っていた。また、ドイツ姉妹校ルドヴィッヒ・ライヒハート高校との直接の交流が復活し、3月に14名のドイツ生徒が来日し、12日間の研修を実施することができた。ホストファミリーになっていただいたご家庭の皆様は、お別れ会の際、「家族ともどもたいへん素晴らしい経験をさせてもらった。」と皆さんが仰っていた。十代の多感な時期に、言語も文化も異なる同世代の若者と交流する機会を得るのはとても貴重である。ドイツ生徒にとってもホストの大高生にとっても生涯忘れられない経験となった。ドイツ姉妹校の新設された校舎には、「ライヒハート高校」



【ドイツ・ブランデンブルグ州ライヒハート高校】

の日本語がデザインされている。姉妹校調印から27年間交流を続けているヴェグナー校長の情熱を感じずにはいられない。

6 保護者や卒業生による学校応援

「チーム大宮」の精神は、教員と生徒だけではなく、保護者や卒業生にも浸透している。「卒業生に学ぶ会」は、保護者が卒業生を招いて受験の体験談を聴く企画である。中学校1, 2年生徒保護者を対象とした学校説明会では、本校保護者が「冬のミニツアー」と称して校内を案内する。また「談話室」といって中学生保護者からの質問や相談にも応じていただいている。保護者同士なので遠慮なく質問できると評判もよい。また、卒業生による母校支援も始まっている。大高を卒業して社会で活躍する先輩たち（大高人）が、1年生の総合的な探究の時間にワークショップをシリーズで開催している。大高人たちは、対面やオンラインで自分の専門分野について語り、大高生と一緒に考え、大高生が考えをまとめて発表するまでファシリテートしてくれる。また、大高人たちは、自分たちの仕事ぶりや高校・大学でやっておくべきことなどを順番で学校に寄稿し、それを進路指導部が「大高人通信」と題して定期発行している。

7 大宮高校の進路指導

大宮高校に入学する生徒は、大学進学を希望している。しかしながら、漠然と大学進学を考えている生徒もいて、まずは大高生活で将来の夢を見つけてほしい。その意味で、授業、部活動、学校行事の全てが大宮高校の最も大切な進路指導となる。文系でも数学や理科で習得する知識が役に立ち、理系でも社会科系科目が大切なことを認識させたい。さらに保健、家庭の授業の重要性を感じてほしい。その考え方を定着させることを前提として、大学進学希望の進路実現のための進路指導を行っている。「学習の手引き」「進路資料」「難関大入試分析」と独自資料を作成し、全般的な進路説明会のほか、東大や医学部に特化した説明会も実施し、担任面談や入試検討会をとおした個々の生徒に応じた指導を行っている。また、3年生には23日間にわたる夏期講習や校内学習合宿（通い5日間）も実施した。

大宮高校の進路指導

主体的な学びの実現

学びのPDCAを自ら回すことを学び、主体的に学ぶことで実力を蓄え、難関国立大学にチャレンジして合格する

総合的な学びの実現

幅広い知識と実力を求める難関大学の入試に向けて、特定の科目に絞るのではなく全教科・科目を大切に、すべての活動に積極的に取り組むことで総合力を高める

	合格者(現役)	進学者(現役)
国公立大学	186(153)	169(143)
(東京大学)	19(13)	19(13)
(東京工業大学)	11(10)	11(10)
(一橋大学)	9(9)	9(9)
私立大学	1173(932)	180(144)
(早稲田大学)	102(79)	36(31)
(慶応大学)	58(47)	22(17)

8 おわりに

17人→23人→93人→119人。この数字は、過去10年毎の東京大学進学者の人数である。一つの指標として東大をあげるが、大宮高校は躍進している。この躍進は、地の利等の要因もあるだろうが、「大宮の街に高い教育を」と願った創設者たちの熱い思いを歴代の教職員が引き継いできた結果だと思えてならない。最後に、いつも大高生に話す締め言葉で紙面を終わらせたい。Dream, Plan, Action and Smile

自ら課題を発見し、柔軟に考え、問題を解決する児童の育成を目指して ～算数科での考えを広げる ICT を活用した授業展開～

富士見市立水谷東小学校 教諭 新井 美沙枝



1 児童の実態から

算数に限らず問題や課題に出会ったときに、「どのようにすれば解決できるのか。」と考えることは大人になっても必要なことである。仕事でもスポーツでも同じである。「自ら課題に向き合い、柔軟に考え、問題を解決する」そのような力を育てていきたいと富士見市で進めている STEM 教育の理念も取り入れながら、ICT を活用した算数の授業を進めている。

本校の課題は、ここ数年の県の学力・学習状況調査では県の平均を下回っている点である。また授業の中で分からないと何も書けないという場面が多くある。

算数の授業の中で「わからないからできない。」「やったことがないからやらない。」ではなくて、習ったことや知識を使ってどうにか解決してみよう、解決の方法は一つではなく、様々な角度からアプローチしてみようと柔軟に考えられるようになってほしい。どのような授業を展開すれば子供たちの考えが深まるのかを中心に研究を進めた。

本校の児童の実態（学力調査より）

正答率が低かった課題点

- 自分の考えを記述・図などに表現する問題
- 他者の考えを図や式等から読み解く問題
- 学びを調整する問題（どうやったら上達できるか）

目指す児童像

自ら課題を発見し、柔軟に考え問題を解決する児童

2 目指す児童像に迫るための授業展開のポイント

「自ら課題を発見し」

- ・児童の発言から今日の課題に気づかせること

「柔軟に考え問題を解決する」

- ・解決の見通しを持つこと

- ・ICT を活用し友達のことを検討して、自分の考えを広げること
- ・適用問題でよりよい方法で解決するよう試すこと

3 授業の展開

(1) 見通しを持つ（課題の発見）

今日はどのような問題なのか、学級全体で確認した後、どのように考えれば解決できそうか見通しを持つことを大切にする。問題提示をした後、自分で解決することを目的として「さあやってみよう。」と投げってしまうのでは、苦手な児童にとってはお手上げである。

ポイント

・情報の整理

「分かっていること」「求めること」は何か。複雑な問題ほど、丁寧にわかっていることをおさえるようにする。

・可視化

文章の情報を、絵、数直線、図に表す。低学年のうちから、情報を簡単な絵に表せるようにしておく。

・見通し

「単純に計算しても無理そうだ。」
「ここが分かれば求められるのではないか。」
子供がつまずきそうな部分を確認してから、今まで習ったことが使えないかなと自力解決に向かうようにする。

例えば、台形の面積の求め方ならば、「三角形の面積は習ったので、三角形にすればできそう。」「平行四辺形の面積も習ったので使えそう。」と子供たちの気づきを板書していく。「三角形の面積」「平行四辺形の面積」の既習事項の復習もできる。

「形を変えて習ったことを使えば求められそう。」
初めての問題にどのようにすれば解決できるのか見通しを持つことができれば、本時の課題が「形を変えて、台形の面積の求め方を考えよう」となる。子供たちの発言をつなげて、課題を設定することでよ

り主体的に取り組むようになる。

(2) みんなで学ぶ (柔軟に考える)

見通しを持って自力解決の時間を十分に取ったあとみんなで学ぶという「考えの共有、検討」の時間を取る。そこで大切にしているのが、友達がどのように考えたのか、みんなで検討するということだ。

「柔軟に考える」ためのポイント

- 自分の考えを説明して終わらない
- ICT を活用して友達の考えを説明する

例「～さんはこんな式に表したのだけど、どうやって考えたのか図に表してタブレットで送ってみよう。」

「～さんはこんな図に表したのだけどどんな式になるかな。」



【友達の考えた式を図で説明する場面】

友達の考えを説明することは、問題を多角的にとらえ、様々な角度から課題を解決する STEM 教育の視点でもある。ここでは、ICT の活用が欠かせない。富士見市で採用しているミライシードの「オクリンク」の機能を活用すると、友達の考えを瞬時に見ることができる。またそこに自分が書き込むことによって理解が深まる。自分の考え方を広げていく上で重要なポイントである。

ICT の良い点は、だれか一人の考えではなく、全員の考えを一度に比較検討できるところだ。共通する点が圧倒的に分かりやすく、まとめにつなげやすくなる。また、わからない児童にとっては、友達の考えを実際に見ることで理解が早まる。それを参考にして自分の考えをかいてよいことも伝えている。みんなに見られるという緊張感も、「分かりやすくかこう。」「もっと工夫してみよう。」と算数が得意な児童にとっても時間を余すことなくより工夫をするようになる。

(3) まとめと適用問題

まとめも児童の言葉を大切にしている。ICT の活用でどの考えにも共通していることが分かりやすくなった。「みんなの考えに共通していたことは何か。」

と問うと、子供たちからキーワードがしっかり出てくる。それを教師が整え、本時のまとめとする。

友達の考えに十分ふれたので、「～さんの方法でやってみよう、試してみよう。」と適用問題に取り組むことができる。

4 成果と課題

個々での考え方が広がったかを見取るのは簡単なことではないが、ICT を活用してからは「振り返り」の言葉が大きく変化してきた。「～さんの考えが分かりやすかった。すごかった。」から、「いろいろな考え方ができることが分かった。」「この場合はこうなと思う。」など主体的に考える言葉が多くなった。それは ICT 活用により、考えが視覚的に分かりやすい点と、子供たちの気づきを大切にし、自分たちで課題を解決したという思いがあるからだと考える。

(感想)
一つの考えかたではなく、改めて色々な考え方が分かった。普段の生活などで生かしたいと思いました。最後に～さんが「すべてをたしたら駅前の方がやすい」というのがいいとおもいました

駅前店、本店、どちらもパンの値段は同じでも、割引の仕方によって、式も答えも変わってくることを知ることができました。でも私なら駅前店で買います。ABC 全部一つずつ買ったとして、500 円を出すと、駅前店の場合は、80 円でお釣りが返ってくる。でも本店の場合は、76 円で返ってくるから、切りのいい方で買います。

【「割合」の振り返り】

成果

- 令和 4 年度の県の学力学習状況調査 (小 5) で、平均正答率が県の平均を上回った。
- 無解答率は、7 割の問題で県の平均よりも良い
- 振り返りの変化

課題

- 誤りを指摘する問題の正答率の低さ
(ICT を使って、間違い例も子供たちが検討するような時間も確保するようにしたい。)

子供たちには様々な考えにふれ、認めるように授業を進めてきた。それを ICT がかなえてくれた。間違っても、途中まででもよいから表現してみる。途中までできたら、みんなの力を合わせれば解決できるということをさらに深めていきたい。対話的な学びがあるからこそ自分自身の考えをよりよく更新できる。みんなで学ぶ意義がある。

これから社会で生きていく上で、正解は一つではない。子供たちには柔軟に考えながら、チャレンジしながら一つずつ課題を解決して欲しい。

参考

画像：株式会社ベネッセコーポレーション

「ミライシード」の「オクリンク」

教師の「問い」がよりよい未来を考える児童を育成する

【概要】 問題解決的な学習を行うことは、主体的・対話的で深い学びにつながる。そして、社会科の目標に到達するためには、学びを方向づける教師の意図的な「問い」が必要である。教師の「問い」が、よりよい未来を考える児童を育成する。



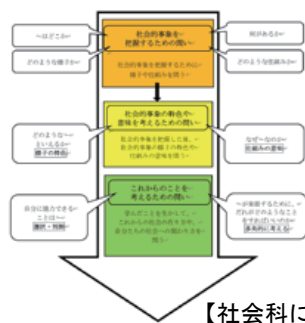
川口市立鳩ヶ谷小学校 主幹教諭 堀 祥子

1 はじめに

社会科の学習では、地域社会や国の仕組み、世界との関わり等の社会的事象について、用語の暗記にとどまらず、獲得した知識を使って考え、その特色や意味まで捉えることが大切である。そして、それらを基に思考・判断・表現することは、よりよい社会を形成していこうとする地域住民、国民、さらにはグローバル化する国際社会の一人として、地球規模で物事を考える子供を育成することにつながると考える。

2 問題解決的な学習の充実及び見方・考え方

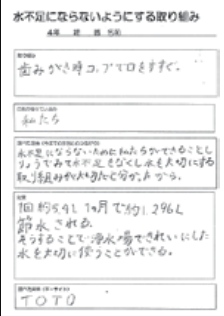
校内研修のテーマを「問題解決的な学習の充実～各教科等の見方・考え方を働かせて～」とした。このテーマは主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を行うための基礎となり、児童の資質・能力の向上、さらには教師の授業力の向上につながると考える。社会科は、問題解決的な学習を通して、過去の取組、人々の工夫や努力・思いや願いを調べ、未来を考えることのできる教科である。そのためには、社会科固有の見方・考え方を働かせることが必要となる。「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方であり、深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要だ。



「見方・考え方を働かせ」るのは、児童だが、働かせるように仕掛け、方向付けるのは教師の役目となる。教師の問いに着目し、「教師が問いを工夫することで、児童は、社会的事象の見方・考え方を働かせ、問題解決的な学習が充実するであろう。」という仮説の下、以下の手立てを設定した。手立て①社会的事象の見方・考え方を位置付けた単元構成②社会的事象の見方・考え方を働かせる1単位時間の問いの設定

3 実践の内容

(1) 第4学年「くらしと水」

社会的な事象を把握するための問い	つかむ	学習問題 わたしたちが生活で使う水はどこでつぐられ、 どのように送られる のだろうか。
	調べる	水道水は どこから始まる のだろうか。 【水源の位置】【県外の協力】
		ダムは どのような働き があるのだろうか。【県内外の人の協力】
		新三郷浄水場では、 どのように水をきれい にしているのだろうか。【工夫】【努力】
意味を考えるための問い	まとめる	なぜ、水道事業が整備された のだろうか。 (関連付け) 学習問題の結論 私たちが使う水道水は、水源地から利根川へいき、ダムや水門を通して、新三郷浄水場へ向かう。新三郷浄水場では、様々な機械やそこで働く人によってきれいにされ、水道管を通して、私たちのもとに届く。生活に欠かせない水は県内外の人たちの協力でいつでも安心、安全に使えるようにされているため、私たちは健康に生活できる。
	生かす	（埼玉県は渇水になることが多いという資料の提示後） 水不足にならないようにするために、自分たちができるのはどのようなこと だろうか。 

児童が社会的事象の見方・考え方を働かせるには単元を通して計画的に問いを設定することが必要である。「まとめる」過程では、「なぜ、水道事業が整備されたのか」と問いかけたことで、「いつでも供給できるようにするために」「水道事業が整備されることで、安心、安全な水が使えるから、健康でいられる」という社会的事象の仕組みの意味まで考えることができた。

(2) 第5学年「水産業がさかんな地域」

本実践では、水産業に関わる人々の工夫や努力によって、我が国の食料生産を支えていることを理解することをねらいとし、学習問題を「水産業がさかんな地域では、どのようにして魚をとり、わたしたちのもとへ届けているのだろうか」と設定した。

「調べる」過程で、水揚げされた水産物が出荷され

るまでの工程について調べ、1 単位時間の流れは以下のようになった。

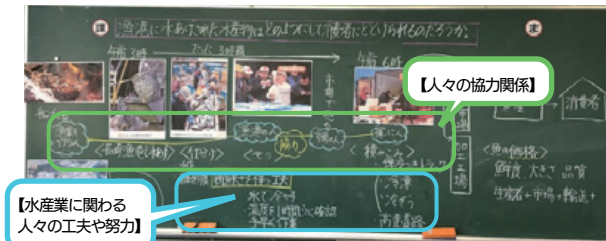
学習課題
 漁港に水あげされた水産物は、**どのようにして消費者に届けられるのだろうか。【工程】**

水あげされた水産物を新鮮なままで保つために、**どのような工夫をしているのだろうか。【工夫】【努力】**

水あげされた水産物は、**どのように運ばれるのだろうか。【輸送方法】**

水あげされた水産物は、**どのような人と関わりながら届けられるのだろうか。【協力】**

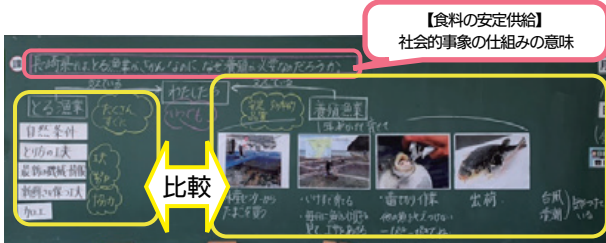
学習課題に対するまとめ
 漁港に水あげされた水産物は、漁港の中で仕分けられ、せりかけられ、トラックなどで運ばれる。短時間で協力して行うため、新鮮なまま消費者に届けられる。



【社会的事象の見方・考え方を位置付けた板書①】

水揚げされた魚が出荷されるまでの資料とともに、「水揚げされた水産物は、**どのような人と関わりながら届けられるのだろうか**」と問い、資料の人や役割に着目させ、人々の協力関係を捉えられるようにした。

「まとめる」過程においては、養殖漁業について調べ、とる漁業と比較し、「**なぜ、とる漁業が盛んなのに、養殖漁業が必要なのだろうか**」と問うことで、どちらも消費者の需要に合わせて生産しているという共通点を見いだした。水産業に関わる人々の工夫や努力と国民の生活を関連付けることで、社会的事象の仕組みの意味まで考えられるようにした。



【社会的事象の見方・考え方を位置付けた板書②】

児童は調べたことを基に、社会的事象の見方・考え方を働かせ、食料の安定供給という仕組みの意味まで考えることができた。84%の児童がそれらを学習問題の結論として記述することができた。

(3) 第6学年「明治の国づくりを進めた人々」

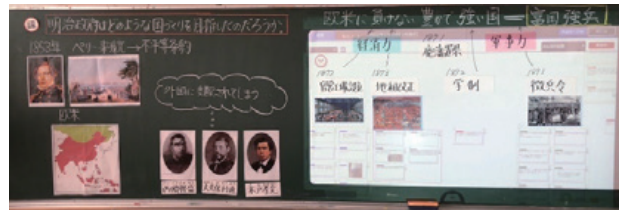
黒船の来航、廃藩置県や四民平等の改革、文明開化などを手掛かりに、我が国が明治維新を機に欧米の文

化を取り入れつつ近代化を進めたことを理解することをねらいとし、学習問題を「明治維新において、世の中はどのように変化したのだろうか」とした。「調べる」過程において、ペリー来航、欧米の東南アジアにおける植民地の資料を提示し、欧米諸国の勢力の広がりに着目させ、当時の社会の様子を捉えられるようにした。



【欧米の東南アジアにおける植民地の広がり】

その後「明治政府は**どのような国づくりを目指したのだろうか**」と問い、富国強兵に力を入れ、明治政府が諸改革を行ったことを捉えられるようにした。歴史学習においては、日本が様々な国と関係を深めながら現在に至り、遠い祖先の生活や人々の工夫や努力が今日の自分たちの生活と深く関わっていることに気付くことが大切である。そのため、当時の世界の動きによって、日本も世の中の様子が変化し、活躍した人物が与えた影響を問う必要性がある。



【社会的事象の見方・考え方を位置付けた板書③】

児童は、調べたことを基に、社会的事象の見方・考え方を働かせ、当時の欧米諸国のアジア進出及び、我が国が諸改革により近代国家としての政治や社会の新たな仕組みを整えたことを理解することができた。87%の児童が学習課題のまとめとして記述していた。

以上、①社会的事象の見方・考え方を位置付けた単元構成、②1 単位時間における社会的事象の見方・考え方を働かせる問いの設定、③教師が問いの工夫をすることにより、問題解決的な学習の充実が図られ、児童が社会的事象の見方・考え方を働かせることにつながったと考える。

4 おわりに

社会科の大前提である問題解決的な学習を行うことは、主体的・対話的で深い学びにつながる。そして、社会科の目標に到達するためには、学びを方向付ける教師の意図的な「問い」が必要である。適切な「問い」により子供たちが深い学びへと到達することができれば、現代的な諸課題へのよりよい解決策を模索することができるに違いない。教師の「問い」が、よりよい未来を考える児童を育成すると信じている。

英語で自己表現できる生徒を育成する授業づくりの推進

基礎・基本の定着を図るためには繰り返しがキーワードであると考えている。新しい表現を学習する際にも+1センテンスを意識させ、既習表現に何度も出会わせている。様々な表現に出会わせるために、生徒の発話を拾い上げ中間指導を充実させるよう努めている。

新座市立第四中学校 教諭 印南 佐代



1 はじめに

本校2学年の生徒は、小学校低学年より「英会話の時間」として英語に慣れ親しんできている。埼玉県学力・学習状況調査において、中学校2年生の英語は一人一人の伸び率をはかることができない。そこで、県平均と比較し課題を捉えた結果、「聞くこと」は県平均(67.3)より4.3ポイント高い71.6であった。一方で、「書くこと」に関しては、県平均との差は1ポイントにとどまり、自分の考えを書くことに対して特に課題が見られた。また、「知識・技能」の観点も県平均との大きな差は見られなかったことから、基礎・基本の定着を図りながら、4技能5領域をバランスよく指導するとともに、帯活動を活用して「書くこと」「話すこと」に重点をおいて指導している。

2 実践内容の紹介

(1) 基礎・基本の定着を図る帯活動

授業では基礎・基本の定着を目的とした帯活動に毎時間取り組むようにしている。帯活動では主に、DictationとSmall talkを行い、既習表現に何度も出会わせる機会を意図的に作り出している。Dictationは「聞くこと」と「書くこと」を、Small talkは「話すこと<やり取り>」と「聞くこと」の基礎・基本定着のために取り組んでいる。

Dictationとは、既習表現を中心とした英文を教師が読み上げ、生徒が書き取る活動である。自然な速さで読み上げることで、リスニング力を高める効果もあると考え、年間を通じて取り組んでいる。ペアで丸付けをする際は、単語一つ一つに丸を付けさせ、生徒の「書けた!」という達成感を味わわせる工夫をしている。基本的な単語を書ける生徒が徐々に増えてきたことは2年間継続して取り組んできた成果であると考えられる。

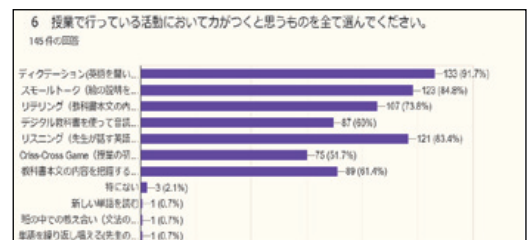
Small talkは、様々なパターンで展開している。以下はパターンの一例である。

- ・ Picture Description (絵を説明する活動)
- ・ トピックについて片方の生徒が30秒程度で発表し、もう片方が内容について質問したり、コメントしたりする。
- ・ トピックについて、ペアで自由に会話をする。

中間指導については、①相づち表現等のコミュニ

ケーションストラテジー、②既習表現の定着、③内容の適切さ、以上の3点のいずれかに重点を置いて指導をしている。机間指導の際に指導する内容を明確にしておき、それに関わる会話ができているペアを確認し、全体場で発表させている。全体に広めたい内容はその場で確認し、使用させたい表現は板書をしている。Small talkは帯活動として継続的に取り組んでいるが、単元で身に付けさせたい技能が「話すこと」の場合には展開で扱い、時間をかけて指導することもある。

なお、生徒アンケートの結果、Dictation及びSmall talkは力がつく活動であると回答している生徒がいずれも85%以上であった。生徒にとって、意義を感じられる活動であると捉えることができる。



生徒アンケート結果「授業で行っている活動において力がつくと思うもの」 R4.12実施

(2) 教科書を活用した授業展開

ア 「話すこと<やり取り>」の指導

教科書の会話文の中に割り込んで会話をするという取組を行っている。利点は中間指導がしやすい点である。「話すこと<やり取り>」の指導の難しさは、会話がそれぞれのペアで異なるため、取り上げる表現が必ずしも全ての生徒に即座に使用できるものではない点である。そのため汎用性の高い表現を中心に指導することとなるが、個別支援がないと中間指導が効果的に働かない生徒もいる。しかし、全員が教科書にある共通の会話の中に入り込むことで、1回目ではうまく会話に入り込むことができなかつた生徒も、中間指導で共有された表現を参考に2回目以降話することができるようになるので、意欲的に取り組むことができる。さらに、共通の話題であることから、語彙指導にもつなげやすい。また、内容面においても、適切なレスポンスなのかを全体で吟味することができる。

活動は3人1組で行っている。生徒は中間指導以外に、2名の生徒の表現を聞くことができる。「友達はSoを使って会話の関係性を見つけ出していたので、接続詞をうまく使ってみたい。」「友達がFor example?と聞いていて、それも言えると思った。」といった振り返りが生徒から挙げられており、対話的な学びにつながっている。なお、この活動を行う前に教科書の会話文を読めるようにしておくことが大切であると考え、デジタル教科書を活用し、教科書の会話文を練習する時間を確保している。単に音読の練習を促すのではなく、音読の先にある活動を提示することで、主体性をもって音読に取り組んでいる生徒の姿が見られることも、この活動の利点である。

イ「読むこと」から「話すこと」「書くこと」への指導

教科書本文の内容理解では、リスニングをする前に「聞き取りポイント」を示し、目的をもって聞き取らせるようにしている。聞き取りポイントをペアごとに日本語で確認させたあと、それを英語でどのように表現するかまで交流させている。

教科書の内容理解の後、Retelling（教科書とは異なる表現で内容を説明する活動）に取り組んでいる。Retellingはやや負荷の高い活動のため、1年生の段階では慣れるまでReproduction（教科書の表現を用いて内容を説明する活動）を行うことが多かった。Retellingでは、主に以下のステップで指導をしている。

- ① 説明に必要なキーワードを抜き出す。(個人)
※写真やイラストを提示することもある。
- ② 抜き出したキーワードを共有する。(ペア)
- ③ キーワードを用いて、教科書とは異なる表現でどのように表現するかを考える。(個人)
- ④ ペアに説明する。(Retelling)
- ⑤ 中間指導
- ⑥ ペアに説明する。(Retelling)
- ⑦ 説明した内容を書く(行わないこともある)

④のペア活動の机間指導の際には、既習表現を活用して自分の言葉で説明している生徒を確認しておくようにしている。⑤の中間指導では、机間指導で見つけた全体に共有したい表現を生徒に発表してもらうことにしている。

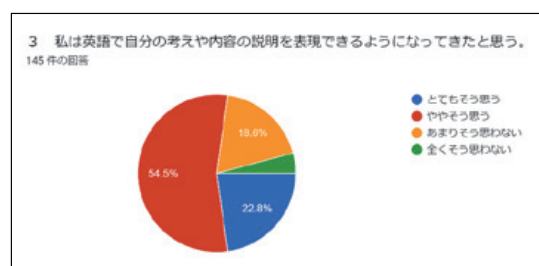
「書くこと」に重点を置いた指導においては、⑦に時間をかけるが、すぐに「書く」ことはせず、上記の手順で取り組ませるようにしている。読んだり聞いたりしたことから「書くこと」につなげるほかの活動（自分の意見や感想を述べる活動）においても同様に、ペアとの意見や感想を交流させてから書かせるようにしている。意見や感想の交流の際には、内容に重点を置けるように、日本語

で話してよいことにしている。

3 成果

令和4年度は「書くこと」はもちろん、聞いたことや読んだことに対してコメントしたり質問をしたりするという活動に重点を置いて取り組んできた。新出表現を使用した言語活動においては、新出表現を使用して会話を終わりにすることはせず、「サービス精神を持って!」を合言葉に、+1センテンス以上を言うように促し、会話を継続させる意識付けをした。その取組の中で、意図的に生徒が既習表現に繰り返し触れるようにし、中間指導に多くの時間を割いた。また、既習表現で言い換えをすることの大切さについても指導してきた。生徒アンケートでは、70%以上の生徒が自分の考え等を表現できるようになってきたと回答している。「授業で、場面によってどのような単語を使えばいいのか学び、前にやった表現を今につなげて考えることができたから。」「今知っている表現では表せなさそうな文章になったとき、言い換えて書くことができたから。」等を理由として挙げており、生徒自身も伸びを実感していることがわかる。

なお、定期テストでの自己表現の問いに対して、58%の生徒はコミュニケーションに支障のない程度で自分の考えを十分に伝えることができています。無回答は全体の9%にとどまり、間違いを恐れずに書こうとする姿が全体的に見られ、授業で学習してきた成果が徐々に表れ始めている。



生徒アンケート結果「英語で自分の考えや内容の説明を表現できるようになってきたと思う」 R4.12 実施

4 課題から見える今後の展望

英語表現を「言う」ことはできても「書く」となると、文法やスペリングの「正確さ」に欠ける点が課題である。しかし教師が正確な英文にするだけでは生徒の力とならない。書いた文をグループで推敲したり、教師が話す英文を聞いたり、教科書の英文を読んだりして、生徒一人一人が自分の間違いに気付き修正できるような授業を展開していく必要がある。また、現在は音読練習の時にだけデジタル教科書を活用しているが、更なる効果的な活用についても研究していきたい。

デジタル採点システムを用いた業務の削減と 観点別評価の実践

【キーワード】「働き方改革」「デジタル採点システム」「Google Classroom」「観点別評価」

県立岩槻商業高等学校 教諭 深谷 遼太



1 本校の概要と現状

本校は大正7年に創立され、今年で106年目を迎える単独商業高校である。旧岩槻城の外堀が敷地の一部となっており、広大な敷地と充実した施設がある。学科は商業科と情報処理科があり、1学年4クラス規模である。近年の学級減に伴い、校内での業務削減と効率化が急務になっている。ICT活用に関しては、PC教室を4室、教員用タブレットが1人1台の環境にあることから積極的に推進している。また同時に、ハード及びソフトウェアの活用、新学習指導要領及び観点別評価への対応についても進捗度を加速している状況である。

2 デジタル採点システムについて

本校は「デジらく採点2 普通紙対応版」を導入している。「デジらく採点2 普通紙対応版」(以下デジらく採点2)とは、定期試験等で教師が作成した解答用紙を配布・回収しスキャナで読み取り、PC画面上で採点するデジタル採点システムである。最大の導入メリットは、採点業務時間の大幅短縮ができることである。設問ごとに全員の解答を表示でき、採点基準がブレずに公平性が担保できる。また、Google Classroom連携によりペーパーレス運用が可能となり、ICT活用を推進したさらなる業務の効率化を図ることができる採点システムである。(スキャネット株式会社より引用)

3 実践内容

概要 担当教科：科学と人間生活(理科)

担当クラス：3年1組～4組(4クラス)

(1) 定期考査の観点別評価について

ア 各観点の評価項目について

(ア) 知識・技能

評価項目	%
定期考査	70
授業プリント・Google スライド	30

(イ) 思考・判断・表現

評価項目	%
定期考査	60
授業プリント・Google スライド	30
グループ活動での表現	10

(ウ) 主体的に学習に取り組む態度

評価項目	%
授業態度	40
グループ活動への意欲	20
提出物	40

上記のように、本科目では各観点において定期考査が占める割合を「知識・技能」で70%、「思考・判断・表現」で60%とし、「主体的に学習に取り組む態度」については評価しないとした。

イ 定期考査について

各定期考査100点の内訳を「知識・技能」70点「思考・判断・表現」30点とした。各学期の定期考査の素点の扱い方について下の表に示す。

	知識・技能	思・判・表
1学期	(中70+期70)÷2	(中30+期30)
2学期	(中70+期70)÷2	(中30+期30)
3学期	学年末70	学年末30×2

【定期考査の素点と観点別評価への換算表】

上記から、同じ1点でも「知識・技能」の1点より「思考・判断・表現」の1点の方に重みが出ることが分かる。定期考査での素点の扱い方については生徒に公表して、フィードバックの時に活用した。

(2) デジらく採点2での採点業務について

ア 生徒の名簿とメールアドレスの登録

「デジらく採点2」に氏名、学年、組、番号とメールアドレス(Gmail)を登録する。Gmailを登録することでGoogle Classroomでのテスト返却が可能となる。

設問	正解	配点	減点	観点別評価
設問10	▼	2,1		知識・技能
設問11	▼	3,2		知識・技能
設問12	▼	3,0		知識・技能
設問13	▼	3,2		思考・判断・表現
設問14	▼	3,2		思考・判断・表現
設問15	▼	3,2		思考・判断・表現
設問16	▼	3,0		知識・技能
設問17	▼	5,3		思考・判断・表現
設問18	▼	3,2		知識・技能

【正解配点登録画面】

Excelで作成した解答欄をスキャン用のWordファイルに貼り付け解答用紙を作成した。完成した解答用紙をスキャンで読み込み、各設問の配点と観点別評価を登録した。各観点を登録することで、合計点数だけでなく、各観点の小計も自動集計されるようにした。

ウ 採点

考査終了後、生徒の解答用紙をスキャンし、PC画面上で採点した。問題ごとに生徒の解答が一覧で表示されるので、前後の生徒と解答を比較しながら採点できた。とくに記述問題では加点・減点の基準が統一できるのでより正確な採点ができた。また、先に間違っている解答だけ×をつけ、残りの未採点を一括で○にすることもできるため、採点ミスが起りにくかった。



【採点画面】

エ 帳票出力と返却

採点終了後は全体平均点、観点別の平均点、各問題の正答率等を自動集計してくれるので必要なデータを帳票として出力し、教員は問題の詳細な分析を行うことができる。

成績概要 3学期学年末考査

全体	総合						観点別評価							
	配点	平均点	得点率	標準偏差	最高点	最低点	配点	平均点	得点率	標準偏差	配点	平均点	得点率	標準偏差
全体	140	70.8	70.8%	16.4	99	25	51.6	73.7%	11.7	19.2	64.0%	6.5		

年クラス	総合						観点別評価							
	配点	平均点	得点率	標準偏差	最高点	最低点	配点	平均点	得点率	標準偏差	配点	平均点	得点率	標準偏差
A	35	68.7	68.7%	14.9	99	42	50.9	72.7%	10.2	17.8	59.2%	6.3		
B	37	75.5	75.5%	14.4	97	40	54.7	78.1%	9.8	20.8	69.3%	6.4		
C	34	63.3	63.3%	17.7	94	25	45.5	65.0%	13.8	17.8	59.3%	6.4		
D	34	75.4	75.4%	15.3	98	41	55.1	78.7%	10.2	20.4	67.8%	6.5		

【帳票出力 成績概要】

また、各生徒には○×がついた採点結果 PDF と学年順位や偏差値が載った個人成績表を個別に出力できる。これらの帳票は Google Classroom で個別に返却できるため、今年度は実験的な運用であったが、定期考査最終日に Google Classroom でのテスト返却を行った。またテスト返しの時間には紙での返却も行い、問題解説と観点別評価の説明を行った。



【採点結果 PDF と 個人成績表】

4 実践の成果

(1) 採点業務の削減と効率化

ア 採点にかかる時間

「デジらく採点2」を用いて採点した結果、4クラス140名分の採点にかかった時間はおよそ2時間45分であった。(全39問、グラフ・記述問題あり) 手動採点のときは1クラスあたり1時間程度かかっていたので、採点時間が3割ほど削減された。特に、各観点の小計とその合計点数を集計する時間がかからないので、その部分での時間削減が非常に大きかった。また、今までの手動集計で起こり得る計算ミスも防げるようになった。生徒の点数は Excel で出力し、直接成績シートへ移すので手入力でのミスもなかった。より正確に短時間で成績処理ができたことは大きな成果である。

イ Google Classroom でのテスト返却

Google Classroom でのテスト返却について授業アンケートの結果は概ね好評だった。Google Classroom でのテスト返却についてどのように感じたか? の問いに対する生徒の記述(抜粋)を以下に示す。

- 学校でテスト返却されるよりも家で早くみたくから Google Classroom の方がいいと思いました。
- 授業前に見ることができ自分の分析もしてくれていてとても便利だと思いました。
- すぐ見られてとてもいいと思う、平均など偏差値などもわかるのですごくわかりやすい。

(2) デジらく採点2 から得たデータの活用

「デジらく採点2」を用いることで得られるデータから、生徒の学習状況を細かく把握できた。テスト返却時には、各観点の点数をもとに、個々に必要な力が何か、考えるきっかけを与えることができた。教員も正答率等のデータから個に応じた指導や声かけを行うことができ、個別最適な学びに向けた一助となった。

また、各観点の習熟度が細かく把握できることで、授業内容や指導方法が適当であったのかを振り返り、その後の授業改善に役立てることもできた。

5 今後の展望、課題

今後、デジらく採点2の活用を小テストまで広げて、採点データの集計・分析をさらに進め、生徒の実態や習熟度にあった授業作りを続けていきたい。さらに他教科との情報共有を図り、業務効率化を進めたい。

観点別評価の課題として、各観点での評価規準やタブレット端末を活用した指導方法の導入など様々な分野で検討する余地がある。授業内で指導方法や評価する観点が多様化するが、今後も指導と評価の一体化を目指していきたい。

ウェルビーイングな学校づくりから考える ワークライフバランスを考えた働き方

～先生方が、笑顔で生き生きと自分の力を発揮して、幸せに働ける学校へ～

上尾市立平方北小学校 校長 なかじま はるみ 晴美



1 はじめに

上尾市立平方北小学校では、学校経営方針にウェルビーイングの考えを取り入れ、全教職員・保護者・地域の方々と共通理解をもって教育活動を進めてきた。その成果の一つとして、教職員の業務改善が挙げられる。今回は、「ウェルビーイング」の概念にも触れながら、ワークライフバランスを考えた働き方の大切さをお伝えしたい。

2 ウェルビーイングとは

第4期教育振興基本計画の中で、「Society5.0」とともに「ウェルビーイング」が柱の一つとなる。では、ウェルビーイングとは何か。

(1) ウェルビーイングの概念

ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいう。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含んだ持続可能な幸福である。そして、多様な個人がそれぞれ幸せや生きがいを感じるとともに、個人を取り巻く場や地域、社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることも含む包括的な概念である。

(2) なぜウェルビーイングが求められるのか

経済先進諸国において、GDPに代表される経済的な豊かさのみならず、精神的な豊かさや健康までを含めて幸福や生きがいを捉える考え方が重視されてきている。その指標をGDW (Gross Domestic Well-being 国内総充実) とし、よりよい社会をデザインしていくためにWell-beingという概念と新指標を、これからの時代の社会アジェンダにすることを目指している。GDPは量的拡大を目指し、物質的な豊かさを測る指標であったのに対して、GDWは質的向上をねらい、実感できる豊かさを測定する指標であるというのが大きな違いだ。

OECD (経済開発機構) の「Learning Compass 2030 (学びの羅針盤 2030)」では、個人と社会のウェルビーイングは「私たちが望む未来 (Future We Want)」であり、社会のウェルビーイングが共通の「目的地」とされている。

これらのことから、教育の現場からも子供たちや教職員、保護者・地域の方々のウェルビーイングの実現

を目指し、向かうべき道であることを示している。

3 学校現場の現状から

学校現場では、3年間続いたコロナ禍の影響、長時間労働問題、人員不足等の課題が山積している。これらのことや校内における様々な要因で、教職員にとってウェルビーイングとはいえない状況が発生してしまっている現場も少なくないと感じている。ウェルビーイングな職場は、「創造性も生産性も高く、離職者が少ない」というエビデンスがある。このような時だからこそ、ウェルビーイングの考え方を共有し、一人でも多くの教職員が笑顔で生き生きと幸せに働くことのできる職場をつくっていくことが必要なのではないだろうか。教職員が笑顔で幸せに働いている姿を見て、子供たちも幸せに生きる力を身につけ成長していく。学校現場の様々な課題解決において、行政的な改革が早急に必要ことはもちろんであるが、現場にいる私達一人一人が諦めずにすべきことがある。それがウェルビーイングの考えの共通理解と体现、実践である。

4 学校で取り入れているウェルビーイングの考え

本校で取り入れているウェルビーイングの知見はいくつかあるが、今回はワークライフバランスに関する内容として「SPIRE論」(元ハーバード大学教授タル・ベン・シャハー博士) とその一部、幸せの「四つの因子」(慶應義塾大学大学院前野隆司教授) を紹介する。

(1) SPIRE論

SPIRE論は、多くの学問(哲学・心理学、芸術、医学等々)・研究結果等を包括的にまとめたもので、ウェルビーイングについて下図の五つ(S・P・I・R・E)に分類し、それぞれを満たすことで、人々は幸せで満ち足りた人生を送ることができると説いている。「幸せ」という概念は太陽の光のようなものであり、その光は強すぎるが、SPIREはその光をプリズムの光のように分けてみたものだ。

SPIRE論は「幸せ」をととても包括的に表現し、めざすところを示している優れた定義である。読者の皆様も、ご自身の状態を当てはめてみて、必要だと思うところを調整し、ウェルビーイングな状態にしていくことをお勧めしたい。各因子について補足する。

Spiritual Well-being (精神的ウェルビーイング) = 主体的・自己肯定感・自己有用感・使命感・自分の本質などがよい状態であること

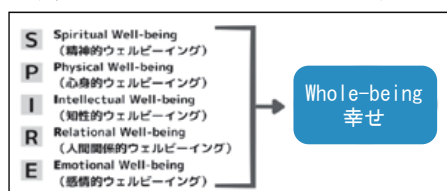
Physical Well-being (心身のウェルビーイング) = 心身共に健康であること、その人にとってよい状態であること

Intellectual Well-being (知性的ウェルビーイング) = 知的好奇心や学ぶ意欲、自分を高める意欲があること

潜在能力を發揮するために、深い学びに没頭すること

Relational Well-being (人間関係ウェルビーイング) = よい人間関係：人間関係は満たされて充実した人生に必須である

Emotional Well-being (感情的ウェルビーイング) = ポジティブな感情・ネガティブな感情も受け入れる・人間としての心のあり方を許すレジリエンス力



(2) 幸せの4因子

前野隆司教授(慶應義塾大学大学院)は、研究結果から、「幸せは次の四つの因子を使うことでコントロールできる」と説いている。4因子とは、

- ・やってみよう！(自己実現と成長の因子)
- ・ありがとう(つながりと感謝の因子)
- ・なんとかなる！(前向きと楽観の因子)
- ・ありのままに(独立とあなたらしさの因子)

この考えは、人々の幸せの要因がどのようなかを人々の現実から構成した結果であり、統計的なエビデンスに基づいたものだ。

この4因子は、様々なウェルビーイングの要素を充実させる心の在り方として理解しやすく、SPIREを実現させるために、4因子のどの心のあり方が足りていないのか、どの心の在り方を意識していくことが必要なのか自分の状態を客観的に見ることができる。

5 ワークライフバランスについて考える

さて、本題のワークライフバランスについて、ウェルビーイングの考えを基に考える。

(1) SPIREのP⇒Physical Well-being(心身のウェルビーイング)から考える

この要素では、心身共に健康な状態であることが、「幸せ」には欠かせないと説いている。教員の多くはS(精神的ウェルビーイング)とI(知性的ウェルビーイング)が高く、自身のP(心身の健康)

は二の次になってしまっていることが多い。多くの教員は、少し無理をしても頑張ってしまう。また頑張ることが自分の使命感を満たし幸せを感じている。そのことの繰り返いを長い期間続け、気づかないうちに心身の健康を害してしまうことがあるのではないだろうか。心身が疲れてくることで、他の大事なウェルビーイングの要素を満たすことができない状況を生み出してしまっていることがある。例えば、「イライラする感情を人にぶつける」「相手への思いやりを忘れて自分中心の言動をとってしまう」等の思考が狭くなってしまふことで、人間関係をうまく構築できなくなってしまうたり、ネガティブな思考をリセットできず、その感情を持ち続け苦しんでしまうことがあったりすることがあげられる。心身の健康を保つためには、まずは思考をリセットする時間(十分な睡眠時間)、回復力を高める等のセルフコンパッションが必要である。また、SPIRE論のRelational Well-beingからも、組織の中の良好な人間関係も欠かせない。組織の中の人間関係で互いを傷つけあってしまったら、組織としての力は激減してしまう。現在、学校現場において、病休取得者、退職者が増えているのには、このことも大きな要因の一つであるように見える。このように、心身共に健康であること(その人にとってよい状態であること)は他の要素へも大きな影響を与えてしまうのだ。そこで、本校では、心身共に個人にとって良い状態であることが、ウェルビーイング5つの要素のうちの一つであることを共通理解し、心身の健康をウェルビーイング(よい状態)に維持できるよう努めている。

(2)「やってみよう」因子で発案し改善策に挑戦する

教職員の「心身の健康のウェルビーイング」を整えるためには、一人一人の健康管理の意識を高めることが第一に大切である。しかし、それだけでは改善されない。特に時間外労働時間が長いと言われていた教員の働き方については、心身共に健康な状態にするために「バランス」を取ることが必要だ。そのことについて全職員の知恵を結集し、まずは、「やってみよう！」の因子を使って業務改善に挑み、教職員の心身の健康状況が改善されれば、他の全ての要素へよい影響が現れ、ワークライフバランスのとれた幸せな職場を実現することが大いに期待できる。

6 ワークライフバランスをウェルビーイングにするための取組(本校での取組例をいくつか例として挙げる)

(1)業務改善(「微差は大差」の視点で時間を生み出す)

身体健康維持のためには、休養や睡眠のための

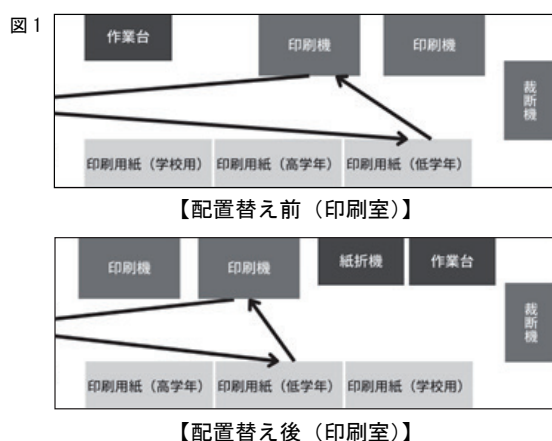
時間の確保である。しっかりと睡眠時間を確保することで、思考がリセットされ翌日にはまた素晴らしい活動ができるのである。良い仕事をするには心と体のリセットの時間が必要だ。そこで本校では次の具体策を積み重ね、超過勤務時間の削減に努めている。ここで大切なのは、強制的に時短をするものではなく、教職員の声を大切にすることだ。

① **紙面カエル会議**：校内共通ファイルに思いついたことを小さなことでも入力して提案する。「業務改善主任」が定期的に確認し、管理職と相談しすぐに取り組めることはすぐに実効する。

② **リアルカエル会議**：業務改善主任の提案で、教職員主体で毎学期末の短い時間（15分程度）確保し、リアルでカエル会議を実施した。教職員の主体的な取組となったので、「会議が増えてよくない」という反対意見は一つも出なかった。（例：社会科見学のしおりはA4判にする。卒業アルバムは文集なしに。健康観察電子化等々）

③ **動線を意識する**：主に作業にかかる物品等の配置をできるだけ最短距離でできるよう、配置替えをする。
（例：コピー機の位置変更、紙置き場の位置変更、足が不自由な方が使えるよう玄関に椅子を設置等々）

④ **学校行事の見直し**：運動会や卒業式の内容見直し。練習時間を年間指導計画の体育の授業や学校行事で計画された時間の範囲で行える内容や指導に変えた。学びの過程を大切にした指導への転換。



(2) 大きな改革も熟議を重ね思いきって行う（例）

本校はコミュニティ・スクールであるため、大きな改革については、校内での考えを基に学校運営協議会でも熟議し、必要性や実施方法等を共に考え実行している。その一例を挙げる。

① **登校時刻変更**：児童の安全面を第一優先に考え、さらに教職員の勤務開始時刻を鑑み、8時15分（勤

務開始時刻）へと変更した。（30分繰り下げ）保護者地域の方々の理解と協力を得て実施することができた。クレームはない。それに伴い、地域の方々が防犯ボランティアとして、登下校時に通学路に立って子供たちの安全の見守りをしてくださることになった。

② **教材費を引き落としへ変更**：手集金をしていた教材費を、銀行からの引き落としへと変更した。保護者の理解を得て行い、滞りなく実施できている。朝担任が集金し、数え、金庫にしまう等の時間がなくなった。

(3) 安心して力を発揮できる、自分の生活も大切にできる職場をつくる（ワークライフの充実）

私たちの生活の多くの時間は職場で過ごす時間が占めている。その長い時間をア：「充実した幸せな気持ちで過ごす」か、イ：「嫌でたまらない状況でやり過ごす」か、これはワークライフの根幹と言ってもよい問題である。もちろん誰もが「ア」を望んでいるはずだ。また、幸せな会社（職場）は生産性・創造性が高く、離職率が低いというエビデンスもある。そのために本校では、全職員が幸せな気持ちで過ごすことができるよう「心理的安全性」について共通理解した上で実践しウェルビーイングな学校づくりに努めている。よりよい仕事をするにはある程度のストレスは必要だが、必要のない無意味なストレスは無い方がいい。

① 全教職員で心理的安全性の高い職場づくりに努める

職場における「心理的安全性」とはどのようなことか。それはチームの一人一人が、率直に意見を言い、質問をしても安全だと感じられる状況があること。そのためには組織の中に「話しやすさ」「助け合い」「挑戦」「新奇歓迎」の四つの因子があることで実現できる。一日の中で多くの時間を費やす職場が、心理的安全性があり、自分の力を発揮することができれば、ワークライフにおけるウェルビーイングは高まる。このことを本校では共通理解をして全職員で心理的安全性の高い職場づくりに全職員で取り組んでいる。

心理的安全性の高い組織は、そのパフォーマンスにおける成果が高いという研究結果がある。高い成果を得ることができれば、自尊感情も高まり、教師としてのSpiritualウェルビーイングも満たされる。



② 平日（授業日）計画年休取得推進

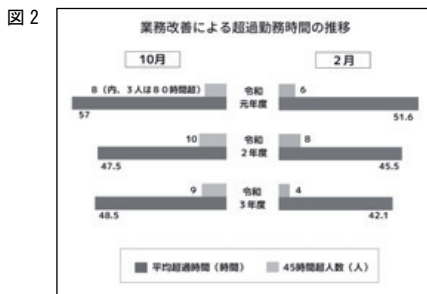
教職員は、平日の授業日には年休を取りにくい。そこには「休むと他の教職員や子供たちに迷惑がかかってしまう」「休むことをよく思わないのではないか」などの心配があるからだ。そこで本校では、「心理的安全性」の考えを基に、協力して体制を整えることを共通理解し、2学期以降1回以上、授業日に一日年休を取得することを推進した。その結果、全員取得することができ、「遠方に住む年若い両親に会いに行くことができた」「結婚記念日を祝うことができた」等、家族との繋がりや見聞を深めたり、リフレッシュをしたりする時間として大変有効活用された。このことは、身体のみならず、心の栄養補給になりストレスオフにする機会としても大変好評である。

7 成果

このように本校では、業務改善をはじめ、幸せな職場づくり＝「ウェルビーイングな学校づくり」を進めることにより、時間的にも精神的にも安心で誰もが健康で生き生きと主体的に働ける環境（ワークライフバランスのよい環境）が少しずつ整ってきている。成果について一部を紹介する。

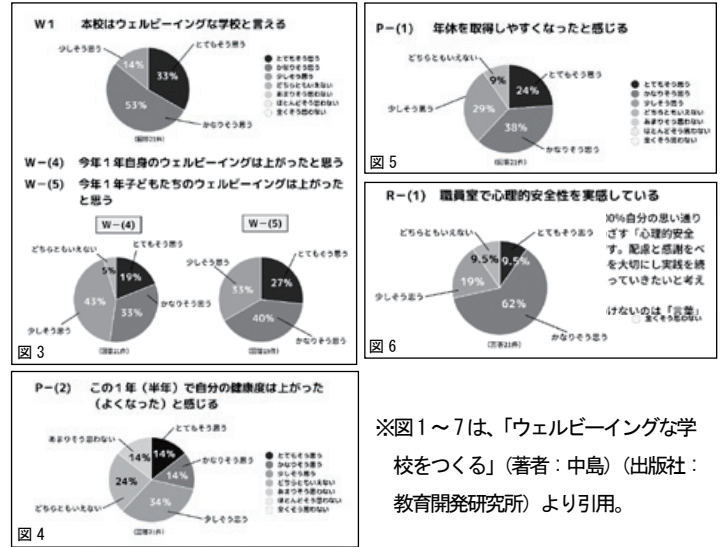
(1) 業務改善による超過勤務時間の推移

令和4年度2月は45時間超え人数は3人、平均時間は39.4時間となった。



(2) 職員のウェルビーイング意識調査（一部抜粋）

これらの結果から、本校職員は心身共に健康で、ウェルビーイングな状態で働くことができていることが分かる。このほか、「自身の教職における強みを発揮しているか」という質問には90%の教員が「そう思う」と回答している。自分の力を発揮できるということは「ワークライフ」の中で最も喜びを感じることである。



※図1～7は、「ウェルビーイングな学校をつくる」(著者：中島)(出版社：教育開発研究所)より引用。

(3) 子供たちの変化

教職員が自分の力を、生き生きと発揮することで、子供たちの様子も、生き生きと学ぶ姿勢へと変化が見られるようになった。「幸せな教師(大人)のもとで、幸せになる力をもった子供が育つ」まさにこのことの証明ではないだろうか。その一つとして、学力向上のエビデンスを挙げる。

図7

学年	令和3年度	
	本校	県平均
5年生	79.0%	77.2%
6年生	92.6%	76.3%

(令和3年度埼玉県学力・学習状況調査結果から)

学年	令和4年度	
	本校	県平均
5年生	86.1%	62.5%
6年生	85.8%	72.2%

(令和4年度埼玉県学力・学習状況調査結果から)

(4) その他

そのほかにも、ウェルビーイングのよい影響が保護者や地域へも連鎖し、令和4年度は多くの方から学校へのお力添えをいただいた。また、学校へのクレームは殆どなかった。このことも教職員の心理的安全性に大きくつながった。

8 まとめ

このように、真の「ワークライフバランス」は、単純な時間の確保だけではなく、ウェルビーイングの考え方や心理的安全性についての知識を、全職員が共通理解した上で、継続して実践していくことで実現される。

素晴らしいワークライフバランスを保つには、心身の健康の維持促進できる時間を作り、その時間を自分や家族のために有効活用できること、そして何より、教職員全員が生き生きと力を発揮し幸せに働ける環境をつくっていくことが必要なのだ。

ペーパーレスへの挑戦 ～道のりと効果～

リコージャパン株式会社 埼玉支社 事業戦略部 プロモーショングループ 倉持 梓



1 はじめに

「リコーのイメージは？」と聞くと大抵の人が「複合機」と回答をする。複合機と紙は、切っても切り離せない関係である。そんな会社がペーパーレス化をどのように進めたのか。

複合機の使い方は、時代と共に変化している。今まではコピー機能・プリンター機能が主流であったが、現在はスキャン機能やクラウドシステムと連携するようになってきている。「働き方改革」「DX」と謳われる時代に、紙の出力は逆行しているのだ。

実は「OA(オフィス・オートメーション)」を日本で初めて提唱したのは、株式会社リコーである。現在、私たちが目指すのは「はたらく人の創造力を支え、ワークプレイスを変えるデジタルサービスを提供すること。」である。少子高齢化による労働人口の減少や、いつ起きるか分からない災害時に事業を継続できるように、デジタルの力で企業の働き方を変えることを使命としている。

そのような私たちがペーパーレス活動を始めたのは2007年頃まで遡る。

2 ペーパーレスへの道のり

プロジェクトチームを結成し、以下五つのフェーズに分けてペーパーレス活動を推進した。

(1) 紙文書の特定

紙文書には2種類ある。利用が個人だけに限定される「個人文書」と、会社として保存が必要な「共有文書」である。

個人文書の管理については判断を持ち主に委ねることにした。持ち主が不明なものは、廃棄した。

共有文書はどのような文書があるか、まずは棚卸をした。部署ごとに、所持している文書を一覧表にまとめてもらい可視化した。

(2) 管理体系の確立

組織文書が特定できれば、その文書をどのように管理するかルール決めが必要になる。私たちは次のようにルールを決め、文書の振り分けを行った。

《文書のルール》

- ・明らかに不要な文書、保存期間満了文書…廃棄
- ・保存が必要だが、低活用文書…外部倉庫預け入れ
- ・高活用で、仕掛かり中の文書…オフィス保管
- ・共有性は高いが、紙の必要が無い文書…電子化

(3) 紙を使わない仕組みの構築

現在保有している文書のペーパーレス化と同時に、業務プロセス自体の電子化も進めた。主には経費精算、勤怠・残業申請などである。

経費精算の業務を例にする。今までは、申請者は紙の領収書を担当部署へ郵送していた。担当部署は、届いた領収書を見ながら、パソコンのシステムに転記入力をしていて、入力ミスをしてはいけないという労力や、収集した領収書を保存・廃棄する手間があった。

現在は、スキャンした領収書を添付し、電子で申請する仕組みになっている。申請時にデータ入力がされているので、担当部署が転記をする手間も無い。

(4) ワークスタイルの変革

紙を増やさない意識になる「オフィスづくり」にも拘った。特に効果が大きかった実践は二つである。

まず一つ目に、ペーパーレス会議だ。今までは、プロジェクターなどの投影機器を必要な時に貸し出していた。プロジェクターを借りに行き、設置をし、会議が始まるという流れであった。機械に慣れている社員であれば不便は無いが、中にはプロジェクターの設置方法が分からず、結局紙で資料を配布してしまう社員もいた。

現在は、打合せスペースに、プロジェクターか電子黒板を常設している。社員はノートパソコンさえ持ってくれば、すぐにペーパーレス会議が始められるようになった。

さらに、打合せ以外のときには、電子黒板をデジタルサイネージ(電子掲示板)としても使用するようにした。今までは社員に知らせたいことを、貼り紙で掲示していたが、デジタルサイネージを

使用することにより、アニメーション付きで訴求力が上がった。配信期間も設定出来るので、古い情報を掲示したままにしてしまうということも無くなった。



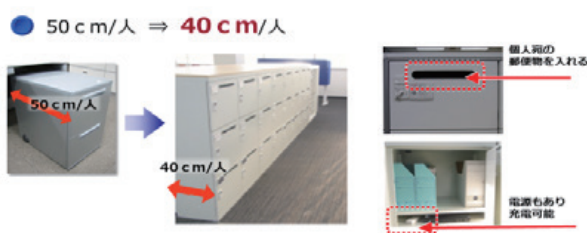
▲ RICOH Interactive Whiteboard
打合せの時には電子黒板として利用し、それ以外のときにはデジタルサイネージとして利用

二つ目は、個人文書保管スペースの制限である。今までは「袖机」と呼ばれる奥行約 50cm の二段キャビネットを、机脇に一人一つ所有していた。

現在は袖机を廃止し、代わりに奥行約 40cm の個人用ロッカーに個人文書を保管している。社員は、このロッカーに入る分しか個人文書を所有することができないため、自然と「紙を持たないようにしよう」という意識が変わった。



個人の保管スペースは必要最小限に。保有する紙書類は限りなくゼロの状態へ



▲ 袖机と個人用ロッカーの比較

(5) 定着

ロッカーに入りきれない文書を出しっぱなしにしている人がいれば「イエローカード」「レッドカード」を渡すパトロール活動も、しばらくは実施した。おかげで、現在はロッカーに入りきれない文書は持たないということが習慣になっている。「クリアデスク」を合言葉に、離席するときには席に物を置かないことがルールとなった。

3 ペーパーレスの効果

ペーパーレスを実施して、社内の雰囲気は大きく変わった。保有文書の見直しをしたことにより、壁一面にあったキャビネットが削減された。窓から日差しが入る明るいオフィスになった。オフィス内のスペースも広くなった。空いたスペースには机を置き、打合せスペースとして生まれ変わり、コミュニケーションの活性化につながった。

働き方にも変化があった。今までは袖机があったため、自席の場所が固定されていたが、ノートパソコンさえあれば、どこでも働ける。オフィス、自宅、外出先と働ける環境を選べるようになった。紙にとらわれない働き方になった。人事異動や組織改革があっても、レイアウト変更が容易になった。

私の主観だが、探し物や紛失をするリスクも減ったと思う。以前は引き出しの中を把握しきれず、奥底から忘れ去られた何年も前の紙資料が出てくることがあった。今は自分で管理できる分量しか書類を保持していない。必要資料を探すときも、パソコン上で検索ができるようになった。

4 最後に

文章にすると、定着までの道のりは容易に感じるが、実際には苦労や失敗があった。一部社員からの反対や、一度減らした紙がリバウンドしてしまうこともあった。そのたびに、ルールの見直しや社員への啓発活動を繰り返した。

日本はペーパーレス化が遅れていると言われている。しかし、変化する社会環境に取り残されないためには、ペーパーレス化は必ず取り組むべきことである。どのような働き方をしたいのか？どのような環境の変化に対応していきたいのか？目標を決めると、自ずとペーパーレスは通るべき道となる。

▼私たちが働くオフィスを LiveOffice として御案内しております。

ViCreA さいたま ホームページ



https://www.ricoh.co.jp/sales/liveoffice/map/v_saitama

理科専科の実践 ～教科担任制の推進～

理科専科の配置による学校における働き方改革の推進及び学習指導の工夫と児童の学力向上を図る取組について報告する。

滑川町立月の輪小学校 教諭 はしもと 橋本 ともか 知香



1 はじめに

本校は、開校14年目で、各学年3～4クラスの中規模校で、人口増加に伴い、児童数が増加している学校である。

本校の実態として、学校における働き方改革の面で課題があり、行事の見直しや会議の精選等を行い、改善を図ってきた。しかしながら、目標である1か月の時間外在校等時間が45時間を下回る教員はごくわずかで、大きな改善には至っていない。

学習面（理科）では、児童が根拠を付けて予想すること、学習の定着、単元への興味の持続、学習したことと日常生活との結び付きの実感等が課題であった。

本校では、令和4年度より、小学校教科担任制推進のための専科指導教員（理科）を配置していただいた。私は、その担当として命課され、前述の課題解決に取り組んだ。

2 実践のねらい

理科専科の特色を生かした実践を行う際に、以下の点をねらいとして取り組んでいく。

- ①理科専科を配置することで、教員の持ち時数を軽減し、時間外在校等時間を減少する。
- ②教科担任制を推進し、学級担任や自身の教材研究に係る時間を縮減し、時間外在校等時間を減少する。
- ③専科指導により、自身の学習指導の充実と児童の学力向上を図る。

3 実践の内容と成果

(1) 働き方改革の推進

理科専科の配置により、該当学年では、教員の持ち時数が週あたり23時間程度となった。さらに、高学年で、理科を含め、教科担任制を実施したことにより、教材研究に係る時間が削減され、以下のように時間外在校等時間が大幅に減少した。

	H30～R3年度	R4年度	増減
5学年	55：23	45：56	- 9：27
6学年	59：27	46：47	- 12：40

【時間外在校等時間の変化】

また、理科専科を配置しない学年では、理科を担当する教員が授業を行いやすいよう一緒に予備実験をしたり、観察・実験方法についてアドバイス

をしたり、準備や片付けのサポートを行ったりし、先生方の負担軽減に取り組んだ。ワークシートや掲示物の共有は、共通指導にもつながった。

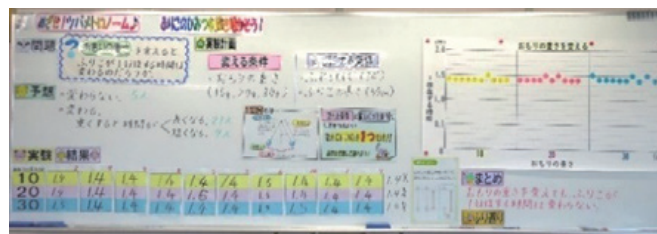
私自身は、不足している備品を揃える等、理科室の環境を整えることで、効率的な理科室の活用を図ることができた。また、専科教員という立場から、教材研究に注力でき、指導スタイルを確立することで、理科専科としての職務に慣れてきた。こうしたことから、私自身も昨年度と比較し、時間外在校等時間が短くなった。

このように学校の働き方改革の面から見ても理科専科の配置、教科担任制の推進は有効であると考えられる。

(2) 学習指導の工夫と児童の学力向上

ア 児童の興味・関心を促し、学習の理解、定着を図る指導

児童の疑問を基に学習を進めていくようにしたり、単元の導入や板書、掲示を工夫したりすることで、児童の興味・関心を促し、学習の理解、定着を図った。掲示物を充実させたことは、児童が学習したことを振り返ったり、学習の進捗を確認したりできるとともに、他学年の学習に興味をもつことにもつながった。また、板書計画を立て、板書を工夫し、児童の学習内容の理解を促した。



【板書 5学年「ふりこのきまり」】



【掲示 6学年「ヒトや動物の体」と5学年「雲と天気の変化」】



【学習の足跡 5学年「ふりこのきまり」】 【ノートまとめのよい例】
学年ごと、単元ごとに掲示した。

効果的にまとめた児童のノートを掲示したことで、工夫して分かりやすくノートをまとめられる児童が増えた。また、この取組は、理科への興味・関心を高めることにつながるとともに、復習にも活用することができた。

イ 系統性を踏まえた指導

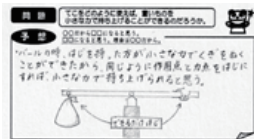
複数の学年を担当することで、学習している単元が前学年のどの単元と結び付いているのか、次学年のどの単元につながっているのかを意識して指導ができた。さらに中学校の教科書も参考にし、中学校の内容との結び付きも意識して指導を行うことができた。



【掲示 「各学年で身に付けたい理科の考え方」】

ウ 根拠を付けた予想ができるようにする指導

ワークシートでいくつかの文型を提示する等、話型を指導したり、図と言葉で表すようにしたりする等の工夫により、根拠を付けて説明できるようになった。また、「なぜ」「どうして」という発問を意図的に増やし、根拠が明確になるように促した。



【児童のワークシート 6学年「てこのはたらき」】

エ 児童が生涯にわたって理科に興味をもてるようにする指導

学習したことが家庭でも継続し、生涯にわたって理科に興味をもてるように、授業の中で、理科に関する出来事を話題にしたり、家庭でも取り組めることを積極的に伝えたりした。

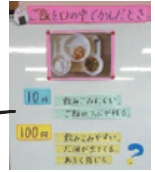
家庭で取り組めるような理科の実験や観察の仕方を伝えたことにより、児童の興味・関心が高まった。



【6学年「水溶液の性質」】
ムラサキキャベツ指示薬で身の周りの水溶液の液性を調べた。家庭でも実験できるように試験管の代わりに卵パックを用いている。授業後、実際に家庭で実践した児童もいて、興味・関心が持続するとともに、以下で述べる日常生活との結び付きの実感にもつながった。

オ 理科の学習と日常生活との結び付きが実感できる指導

理科学習と日常生活の結び付きが実感できるように、実物や映像、掲示等を活用し視覚化して伝えた。



給食のご飯を噛んだときの口の中の様子を導入につなげた。

【掲示 6学年「ヒトや動物の体」】

上記ア～オについては、学級担任時は、他教科の教材研究もあり、教材の選定や作成に係る時間を十分に確保できず、その効果に疑問を感じることもあったが、現在は、授業後に効果の検証まで行うことができ、次の実践への改善につながっている。

ア～オの指導の工夫を行ったことにより、理科のテストの全単元の正答率は、90%となった。

また、児童の理科への意識は、以下の表のように変容した。

どの項目も数値が上昇し、成果が表れている。

質問項目	当てはまる		どちらかといえば当てはまる		どちらかといえば当てはまらない		当てはまらない	
	R4 4月	R5 3月	R4 4月	R5 3月	R4 4月	R5 3月	R4 4月	R5 3月
①理科が好きだ	61%	63%	31%	34%	5%	3%	3%	0%
	+2		+3		-2		-3	
②観察が好きだ	45%	59%	38%	31%	14%	8%	3%	2%
	+14		7		-6		-1	
③実験が好きだ	80%	87%	15%	12%	4%	1%	1%	0%
	+7		-3		-3		-1	
④理科の授業の内容がよく分かる	50%	77%	43%	22%	5%	1%	2%	0%
	+27		-21		-4		-2	
⑤根拠を付けて予想することができる	26%	44%	47%	50%	24%	5%	3%	1%
	+18		+3		-19		-2	
⑥理科の学習は普段の生活とよく結び付いている	53%	76%	30%	21%	14%	3%	3%	0%
	+23		-9		-11		-3	
⑦理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないかを考える	24%	30%	41%	50%	23%	15%	12%	5%
	+6		+9		-8		-7	
⑧理科で学習したことをお家の人に話す	33%	43%	28%	37%	23%	14%	16%	6%
	+10		+9		-9		-10	
⑨お家でも観察や実験をしている	20%	37%	31%	38%	31%	16%	18%	9%
	+17		+7		-15		-9	
⑩自然の事柄に「不思議だな」「おもしろいな。」等と思う	65%	73%	26%	21%	7%	6%	2%	0%
	+8		-5		-1		-2	

【理科に対する意識調査アンケート集計】

特に、④の項目の伸びが大きい。これは、教材研究の深まり、ワークシート、板書や掲示の工夫等の成果だと考えられる。

また、理科の学習と日常生活との結び付きを意識した授業や掲示等の工夫をしたことで、⑥⑦の項目の伸びにつながったと考えられる。

さらに、⑧⑨の項目の結果から、授業以外でも理科への興味・関心が持続していることが伺える。

4 今後の展望と課題

今後は、中学校と連携をして、より系統的に指導し、自らの指導力向上と児童の学力向上に努めていきたい。また、より一層教材研究を深め、魅力ある授業を展開し、理科好きの児童を育成していきたい。

志に生きる

「よさ」を認め「可能性」を伸ばす久喜中学校

～よりよい社会の創り手を育てる久喜中版「令和の日本型教育」を目指して～

久喜市立久喜中学校 校長 木村 信之



1 はじめに - 久喜中学校概要 -



昭和22年創設、今年度で77年目を迎える。JR東北線の沿線都市として発展する久喜市の伝統校である。本校校庭のイチョウ並木は美観の一つ。学校教育目標「志に

生きる」の下、志のある生徒の育成を目指し、生徒一人一人の「よさ」を認め「可能性」を伸ばすことを目指す学校像としている。本年度生徒数511名。

2 近年の特色ある取組

(1) GIGAスクール構想への取組

コロナ禍となり、久喜市教育委員会の御指導により、いち早くオンライン授業への取組がなされた。現在、双方向のオンライン授業が問題なく行われ、ICTを使うことだけではなく、学力向上に繋がる効果的な授業での活用方法やAIドリルを活用した家庭学習、自主的な学びについて研究を進めている。また、学びの核となるIntel STEAM Labの実証研究校として高性能PCや3Dプリンターを活用し学びの可能性を広げている。

(2) 令和の時代に合った制服へのマイナーチェンジ

本校は緑色のブレザースタイルの制服がいち早く30年前に導入されているが、多様性の観点や時代の流れに合わせ令和の日本型教育の一つとして、周知されたカラーはそのままに女子用スラックスの設定、リボンとネクタイの選択制、ニットベストへの変更、素材の見直し、機能性（ウォッシュャブル、防しわ・防汚・防臭加工）を追加し多様性を認め、選択可能な形とした。あわせて、価格を下げることに成功した。

(3) 多様性を認める校則への改定

靴やカバン、髪型の自由化を本年度より実施する。「説明できない規則は改善する」ことを目標とし、教員自身が思考をアップデートした。教師が生徒を取り締まる役割から解放され、生徒の「よさ」や「個性」を認められる関係性を目指すとともに、生徒が生き生きと学校生活を送ることができる環境を整えている。

(4) コミュニティ・スクール（学校運営協議会）

平成29年4月からコミュニティ・スクールとなった。学校運営協議会を設置し、保護者、地域、学識経験者、職員が一丸となり学校運営を進めている。前述の制服や校則についても御意見をいただき、勉強会や企業の選定など実務部隊として多大なる御協力をいただいた。今年度は学習部や環境整備部、企画部等の各部門を分担し、より積極的に学校運営に係わっていく。

(5) 小中一貫教育を推進する遷善館学園

久喜中学校区の3小学校と小中一貫教育を推進する遷善館学園を組織し、月一の校長会、長期休業時の教科・領域別研修会、授業相互見学で成果を上げている。「9年間で子どもを育てる」という教職員の意識の醸成に繋がっている。

3 久喜中版「令和の日本型教育」を目指して



【久喜中版「令和の日本型学校教育」概念図】

本校の研修課題は久喜中版「令和の日本型学校教育」である。「令和の日本型学校教育」とは、「ツールとしてのICTを基盤としつつ、日本型学校教育を発展させ、2020年代を通じて実現を目指す学校教育」であるとした上で、

目指す姿を「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」としている。この「目指す姿」を久喜中学校における教育課程を通じて実現を図るため、文部科学省から授業時数特例校の指定を受け「久喜中版」と冠するものである。本研究発表は11月7日を予定している。

4 おわりに

本校では、学校教育目標「志に生きる」の実現に至る段階を「子供たちは、安心できる環境にいるからこそ努力や挑戦ができる」ことを基盤とし、階層として概念化している。（上図参照）今後も学校教育目標の実現を目指し、諸先輩の努力の上に、プラス思考の素晴らしい教職員集団と共に子供たちにも教員にとっても魅力的な学校づくりを進めていきたい。

「一人一人を大切にする、専門性の高い、児童生徒 ・保護者・地域と共に生きる、開かれた信頼される学校」

～毛呂山特別支援学校の取組～

県立毛呂山特別支援学校 校長 やまごき 山崎 ひとし 仁之



1 はじめに

本校は平成3年4月に開校し、今年で開校33年目を迎える。坂戸市・鶴ヶ島市・越生町・鳩山町そして毛呂山町を学区とする知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校である。

現在、小学部67名、中学部44名、高等部63名、全校174名の児童生徒が学んでおり、学校教育目標「明るく、仲よく、たくましく」を達成すべく、日々教育活動を進めている。本校の取組を簡単に述べる。

2 本校の教育活動

(1) ICTを活用した授業実践

令和2年度に整備された学習端末(iPad)を活用し、令和3年度より2年間、ICTを活用した授業実践を研究のテーマとした。

国語で「Zoomホワイトボード」を活用した。リアルタイムで友人や教員と意見を共有し、教員は、生徒一人一人の表現をみとることで効果的に個別の対応ができた。

動画編集アプリを用い、合奏における楽器ごとの見本動画を作成した。何度も繰り返し再生でき児童生徒の主体的な活動につながった。

その他、「DropTalk」による発語の少ない児童生徒への支援や、近隣小学校とのオンライン交流会など、現在は、日常的にタブレットやテレビモニター等を活用する風景が見られる。

(2) 自立活動の充実に向けて

自立活動では、児童生徒一人一人のニーズに応じた学習に取り組んでいる。授業中、複数の生徒でグループを構成する一方、特性に応じて個別に課題に取り組ませている。弁別学習などの教材も個に応じた教員の手作りのものを使用することが多い。今年度から自立活動を研究テーマとし、目的や内容の再確認や校内及び近隣特別支援学級との教材教具の共有化などセンターの機能を生かした地域連携の取組等を進めている。

(3) 12年間を見通した進路支援

卒業後の自立と社会参加を目指し、進路への見通しを児童生徒や保護者がもてるよう、高等部だけでなく小学部の段階から外部機関等と連携して進路学習を実施している。

行政・相談支援機関による保護者向け説明会(6

月)：学区内市町福祉課等から保護者に向けた福祉サービスに関する説明会である。役所に出向くことの少ない保護者にも、福祉行政の窓口や担当の方とのつながりが期待される。



【説明会の様子】

もろとくしんろフェア(7月)：校外公共施設を会場とし約50の近隣作業所が参加する。ブースを設け、本校児童生徒・保護者、地域の特別支援学級関係者、福祉担当者らも参加し本校卒業後の進路や生活をイメージし、一緒に考える機会としている。

その他、保護者向けに、障害年金やグループホームなどの卒業後を見据えた、外部講師による学習会を多く開催し、情報を提供している。

3 働き方改革の推進

教育力の向上に向けて働き方改革を進めている。本校では以前より校務分掌と各種委員会を見直し組織のスリム化が行われていた。その他、本校の取組について述べる。

(1) 会議の精選、効率化

職員会議を原則月に一度にしているほか、朝会を週に3回にするなど会議等を精選した。また、会議資料を事前に学校HP内職員掲示板にて共有、発言者はポイントをしぼるなど教務部が中心となって「会議の進め方」を示し、ペーパーレス化と効率化が実感できるものとなっている。

(2) ICTの活用

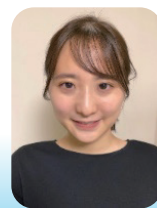
スクールバス降車確認でGoogleスプレッドシートを活用している。また、アンケートにおけるGoogleフォームの利用、指導要録の電子化が行われている。今年度は、Googleクラスルームの運用や児童生徒の出欠確認、下校方法の確認から学校日誌の記録までをタブレット入力による一元化に向けた取組を始めた。

4 おわりに

本校は、令和5年度よりコミュニティ・スクールとなった。保護者・地域・学校が連携をより深め、共生社会の実現を目指し今後も教育活動を進めていきたい。

「魔法使い」のような養護教諭を目指して

川越市立初雁中学校 養護教諭 加藤 百香



1 はじめに

本校は、昨年度創立 75 周年を迎えた伝統校である。目指す生徒像は「なりたい自分になる」。なりたい自分を模索しながら一生懸命に生きる生徒とともに、私自身もなりたい自分を目指し奮闘している。私のなりたい自分：目指す養護教諭像は、「魔法使い」のような養護教諭である。中学生の時に「養護教諭は魔法使いみたいで凄いな」と感じてから、変わらず目標とし続けている。漠然としたこの目標は、初任者研修での多くの出会いと学びを通して明確な目標となり、日々の生徒との関わりを通して揺るがない目標となった。

2 「魔法使い」のような養護教諭とは

養護教諭は、いつの時代も生徒を守る適切な応急手当・救命処置が一番求められる。加えて、保健教育や新興感染症に係る対応、健康診断や健康相談と多くの執務がある。また、これらを全て円滑に行うためには、土台である保健室経営を滞りなく行う必要があると学んだ。これらを満足にこなしつつ、生徒の前ではいつも笑顔でいたい。どのような状況下でも誠実に向き合いたい。安心できる声かけや迅速な対応等の工夫で、生徒の痛みや苦しみを少しでも軽減できるようになりたい。上記全てが網羅できて、はじめて「魔法使い」のような養護教諭になれるのだと思う。私にはまだ到達できない、高い目標である。

3 「魔法使い」のような養護教諭になるために

(1) 応急手当・救急処置の判断力と技能向上

生徒の来室理由は、小さなケガから命に関わる大きな傷病まで様々である。また、同じ傷病でも、痛みの感じ方は生徒によって様々である。「一つ一つ、一人一人の状態を痛みに寄り添いながら、的確に判断し、丁寧かつ迅速に」を日々の目標に対応したい。

具体的には、生徒の受傷機転を整理し、生徒の心身の状態からその場、その時にできる最善の手当てを行う。常に最悪の場合を想定し、どのような時も自分の目、耳、手と言葉の全てを使い、対応にあたる。これらにより症状の悪化、重大な傷病の見落としを防ぐ。事後フォローも怠らない。適切な対応で生徒の苦痛や不安を取り除き、安心してその後の生活が送れるようにしたい。

(2) 生徒の変化やサインを見落とさない

内科的な不調や健康相談と教育相談・生徒指導対応は密接な関係であると思う。本校でも、最初は内科的不調を訴えており、のちに教育相談対応が必要となった事例が何件もあった。生徒が勇気を出して表現したサインを見落とすことは絶対にしたくない。

内科的不調の際は、常に心理面の不調を念頭に置き対応する。その上でまずは器質的問題があるかを問診や視診、バイタルサインで判断する。問診では、身体面のアセスメントの際に、心理・社会的アセスメントを織り交ぜて対応にあたる。非言語的コミュニケーションも意識しながら生徒の心にそっと寄り添い、不安でいっぱいな心を少しでも軽くしたい。サインや変化に気づいた場合は、すぐに情報を共有し、チームで対応にあたる。他教職員や他機関につながるつても、つながりは持ち続け、切れ目のない支援をしていきたい。

(3) 全ての基盤となる信頼関係の構築

生徒や保護者、教職員間の信頼関係がなくては、どの執務においても満足のいく成果はでない。信頼関係を築くためには、深い生徒理解が不可欠である。また、保健室で見せる一面を理解しているだけでは、深い生徒理解とは言い難い。そこで、朝の校内巡視と下校時の見守りを積極的に行い、生徒の様子を広く捉えること、職員間の情報共有で、生徒理解を深め、生徒のサインを見落とさないようにしている。加えて、これらの取組により、保健室に来室する一部の生徒だけではなく、全校の生徒と一定のつながりを持ち、どの生徒の変化やサインにも気がつけるような心がけていく。

信頼関係は一朝一夕に培われるものではない。誰に対しても丁寧、誠実な対応を心がけ、一つずつ積み重ねていくことで更なる信頼関係を築いていきたい。

(4) 生涯に渡って学び続ける

自身の経験の少なさ、知識の乏しさに悔しさを感じた場面が何度もある。今後も生徒の抱える問題は多様化・複雑化していくことが予想され、高い専門性やチームとしての対応が不可欠であるに違いない。そのため、経験を重ねても学び続けることでよりよい生徒対応につなげたい。机上での学びや研修会で学びを深めるとともに、所属校の教諭や地域の養護教諭、学校医や学校薬剤師等、学校内外の方々とのつながりからも学び続けていきたい。

4 おわりに

教育実習、臨時採用、初雁中学校で多くの生徒や先生方と出会い、沢山の思いや願いに触れ、学ばせていただいたから今の私があり、ずっと変わらない目標がある。今までとこれからの縁を大切にしながら、「魔法使い」のような養護教諭を目指して歩み続けたい。今後も生徒がそれぞれの「なりたい自分」になれるよう、その基盤となる心身の健康を守り、育んでいきたい。

一つの輪

三郷市立幸房小学校 校長 なかにし 健二 けんじ



管理職の魅力を語るに十分ではないが、今までの校長生活の中で、心を大きく揺さぶられた出来事をいくつか紹介させていただく。

【卒業式】

「卒業生入場。」

一歩ずつ歩みを進める卒業生。眼差しは力強く未来を見つめる。私は、教え子たちの入場を正面で受け止める。校長として、この子たちにベストを尽くせたのだろうかと自問しながら。

「卒業証書授与。」

予期せぬ出来事が起こった。なんと卒業生一人一人がそれぞれお別れのメッセージをささやいていくではないか。

「校長先生のあの時のあの言葉で積極的な自分に変わることができました。ありがとうございました。」

わずかな間で、マイクが拾えない小さな声で。おそらく会場で、その声を耳にしているのは私だけである。

卒業生からのサプライズである。もう涙をこらえるどころではなかった。

このサプライズは、勿論6年生担任の指導あってこのことであり、その思いと温かさに感謝しかない。

「卒業生退場。」

卒業生が丁寧な礼の後パッと向きを変える。所作が美しい。堂々と6年間の学舎を巣立って行く、目には涙。壇上から最後の教え子が会場を後にするまで、「あなたの未来に幸あれ。」と祈り続けた。

【担任の涙】

11月の半ば頃、6年担任が一人校長室へ。行事が一段落して子供たちが目標を失い、やる気を感じ無いばかりか、友達同士の小さなトラブルが跡を絶たないと言う。すぐに教頭、教務、学年主任を加えた作戦会議。決まった作戦は①クラス再生作戦は、子供たちと一緒に作る、②期日を決めて発表会か大会を開催する、③達成目標を具体的に決めさせる、であった。

翌日、早速学級会。難産であったが、3週間後に学級内長縄8の字跳び記録会をすることになった。目標は4チームの合計を100回増やすこと。ここは、あえて集団の目標にこだわらせた。

練習は多くの先生に協力してもらい、厳しく、優しく、

声をかけ、とにかく総出で手間をかけた。

4人のリーダーには校長室で、チームになるためには、リーダーの献身的な努力が不可欠であることを話した。

いよいよ記録会。いつも以上にみんなの心が一つになり、担任のストップウォッチを持つ手に力が入る。終了の笛と同時に全てのチームから歓声が。震える声で4チーム総合計を担任が発表するや否や、大歓声、そして全員がガッツポーズ。担任はその中心にいた。

その担任からの年賀状。最終評価シートの私の言葉を待ち受けにしています、とあった。照れ臭い。

【大好きな写真】

時は平成。もうすぐ春分の日。

春のやわらかな日差しが運動場を包み込む。朝の全校運動。「今日は心を一つにするぞ。」

体育主任の声が運動場いっぱいに響き渡った。全校児童に教職員も加わり、大トラックに全員の大きな一つの輪が出来上がった。

「今年度、皆はアクティブに挑戦しこの学校は、やる気にあふれています。来年度はトライ&エラーで、今までで一番ステキな学校にしよう！」



熱いメッセージの後、体育主任 **【運動場に一つの輪】**

に促されて一人の6年男子が円陣の中心へ。良い資質を持っているのに悔しい思いを重ねてきた子である。その子の表情が引き締め、ありったけの声をあげての彦郷コール（以前の勤務校の彦郷小に由来）。その子の気持ちが全校児童の心を動かした。校舎を揺るがすかのような全校一つの声、最後の「オーッ」と同時に全員が自らの足を一步前に出し地面を強く踏み締めた。

2年後のある夜。あの男子と偶然に会った。今、サッカー部に所属し、充実した中学校生活を送っていること、小学校の学びが今に繋がっていることなどを、目を輝かせて話してくれた。中学校2年間の彼の努力と成長に思いを馳せ、最高に幸せな時間となった。

教職員と一つになり、子供たちのために夢中になって教育をし、子供たちの成長や成果をみんな喜び合える校長でありたい。みんなの笑顔の輪の中にいる時ほど幸せなことはない。

「誰一人置き去りにしない教育をめざして」



飯能市教育委員会教育長 中村 力

1 はじめに

「教育は人づくり」という言葉を大切にしている。そして、「人づくり」に対して、ぶれてはいけなく考えていることが2点ある。一つは、どのような「人づくり」を目指すかである。これは、教育基本法第1条（教育の目的）の「人格の完成をめざし・・・」と捉えている。特に、ゴールを決めずに常に前進し続けることが教育には不可欠であり、「めざす」という表現は大変重要なことと考えている。もう一つが、「人づくり」をする上で、誰一人置き去りにしてはいけなくことである。「人づくり」を目指すため、各自治体や学校で実態などに即した様々な教育活動が実践されるのは当然だが、唯一共通することが、誰一人置き去りにしないこととであろう。教育に携わるものにとって不可欠な責務であり、私も浅学非才ながら、実現をめざし、日々努めている。

2 飯能市が進める「学びの改革」

飯能市では、誰一人置き去りにすることのない「人づくり」を実現するため、第2次飯能市教育大綱・第3期飯能市教育振興基本計画において、様々な施策を実施している。その中で、学校教育の施策の大きな柱の一つとして、『学びの共同体が創る「21世紀型の学校」を目指し、一人の漏れも無く質の高い学びを保障する「学びの改革」』を推進している。誰一人置き去りにしない教育の実践例として紹介する。



【ペア学習ができる
コの字型授業】

「学びの改革」は、次のような学習を実践する。

- 子どもを信頼し尊敬する学習（学びの尊厳）
 - ・「つまずき」や「わからなさ」を共有し、そこから出発する学習（わからないことをわからないと言える教室）
 - ・教科の本質にそった学び（例：国語は国語らしい学び）
 - ・学び合う学習（聴き合う関係）
 - ・「挑戦」のある学習（子供が夢中になって取り組むジャンプの課題）
 - ・「できる」喜び ⇒ 「できるまでの過程を経験する」喜びを味わう学習
 - 最先端 ICT を活用する学習～飯能市 GIGA スクール～
 - ・「教える」ツールではなく、「学び」のツールとしての学習用タブレットの活用
- このような授業をデザインするには、教員の力量の向上が欠かせない。本市では、市の予算で「学びの改革」推

進の研修費を計上し、外部講師の先生方を積極的に招聘し、各小中学校において研修を重ねていただいている。研修は必ず授業研究から始まる。「一人一授業」を合言葉に、市内全ての教員に年間最低一回授業を公開していただいている。そして、研究協議では、子どもの変容の様子から教員が学び合っている。



【タブレットを活用した
学び合いの授業】

「学びの改革」の授業を参観すると、共通の課題に黙々と取り組む姿や「わからない」の一言から学び合う姿など、児童生徒が主体的に学びに向かい合う様子が見られる。また、ジャンプの課題に果敢に挑戦し、より一層深く考え、聴き合う姿が見られる。何よりもすばらしいのは、ジャンプの課題が解決できた時の、児童生徒の笑顔である。



【授業を参観する教員】

3 終わりに

「学びの改革」は、前任の今井教育長と当時の学校教育部の職員により挑戦が始まった。市教育振興基本計画の取組としては、令和3年度からのスタートだが、それ以前から取り組んでいた二つの小学校では、全校児童とまでは言い切れないが、多くの児童により変容が見られている。学力向上、学習意欲の向上、よりよい人間関係の構築などはもちろん、不登校の未然防止や家庭・地域との連携の進化にも成果が出ている。このような成果が見られる以上、「学びの改革」を市内全ての小中学校に拡大していくことが、現在の大きな目標である。目標達成することが、飯能市の児童生徒に「一人の漏れのない質の高い学力を保障する」ことになると期待している。

現在、計画の折り返しを迎える時期が近づいているが、「学びの改革」に取り組んでいた学校は増えている。今後、講師招聘の予算の増額など解決すべき課題はあるが、冒頭で述べさせていただいた教育基本法第1条に即した「人づくり」、一人も置き去りにしない「人づくり」に近づくため、課題を早急に解決し、前進していく所存である。そして、計画が終了する令和7年度には、飯能市の全ての児童生徒が、学ぶ楽しさを知り、活き活きと笑顔で学校に登校できることを願っている。

豊かな自然と歴史が息づくまち ぎょうだ

行田市総合政策部 広報広聴課 主事 うえすぎ 上杉 しょうへい 昌平



行田市は埼玉県北部に位置し、都心からは約 60 km、電車で約 60 分圏内の距離にあります。北側に利根川、南側に荒川という二大河川に挟まれ、肥沃な平野部とのどかな田園風景が広がる水と緑に恵まれたまちです。また、年間を通して際立った風水害や降雪もなく、災害の少ない地域です。

埼玉県名発祥の地 行田

国の特別史跡にも指定されている埼玉古墳群さきたまには、国宝「金錯銘鉄剣」が出土した稲荷山古墳や、日本最大級の円墳である丸墓山古墳など 9 基の大型古墳が群集しており、埼玉県名発祥の地として知られています。

そのほかにも悠久の眠りから目覚め開花した古代蓮など 42 種約 12 万株の蓮の花が咲く古代蓮の里や、戦国時代の終わりに豊臣秀吉の命を受けた石田三成らによる水攻めに耐え抜き、映画『のぼうの城』の舞台にもなった忍城址が存在します。また、日本一の足袋の生産地であり、平成 29 年には行田足袋と足袋蔵のストーリー「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」が県内初の日本遺産に認定されました。



【忍城址】

ギネス世界記録®「世界最大の田んぼアート」

行田市のおいしいお米の PR と観光客の誘致を目的に、平成 20 年から始まった田んぼアートは、平成 27 年に「最大の田んぼアート」として、ギネス世界記録®に認定されました。

古代蓮の里東側の約 2.8 ヘクタールの水田に色彩の異なる複数の稲を使い、毎回違った絵を表現しています。見頃は、7 月中旬から 10 月中旬までで、隣接する古代蓮会館展望室から御覧になれます。



【田んぼアート（平成 27 年）】

行田「花手水 week」・ライトアップイベント

「コロナ禍での来訪者に癒しを」と令和 2 年 4 月から行田八幡神社で花手水が飾られました。これをきっかけに、同年 10 月から花手水を飾る行田「花手水 week」が毎月 1 日～14 日（11 月・1 月は 15 日～末日）の期間で行われています。神社のみならず、忍城址や商店、民家などに飾られた花手水がまちを華やかに彩っています。また、令和 3 年 4 月からは「希望の光」をテーマに、花手水のライトアップイベントが月 1 回開催されています。日没から午後 8 時まで、行田八幡神社や忍城址、両スポット間の店舗や軒先などに設置された花手水が水の中から照らされるなど、幻想的な風景を醸し出します。

この「行田花手水 week 及び希望の光」は、一般社団法人地域活性化センター主催の第 27 回ふるさとイベント大賞で「ふるさとキラリ賞」を受賞しました。



【ライトアップされた花手水】

狭山茶の輸出と三平蒸籠 ～増田三平の挑戦～

入間市博物館 学芸員 三浦 久美子

増田三平は、文政3年(1820)、入間郡小谷田村牛沢の豪農で酒造を営む増田勘左衛門の長男に生まれました。父の跡を継いで勘兵衛を名乗り、明治になると三平と称しました。酒造業に熱心で、商才もあり、積極的な人でした。



【増田三平】

幕末に横浜が開港すると、お茶は生糸に次ぐ重要な輸出品となり、この地方の茶も八王子を経て横浜に運ばれ、アメリカやカナダに輸出されるようになりました。これからは茶業が有望だと確信した三平は、明治2年(1869)、20町歩(約20ha)を開墾して茶を植えるという大きな計画を始めます。当時、茶の木は畑の周りなどに風除けとして植えたものを摘むのが一般的で、広い茶園は先進的な試みでした。そして数年後には数千貫(1000貫=37.5t)の青葉(新芽)が収穫できるようになりました。ところが、青葉は摘んだ後なるべく早く蒸さなければならぬのですが、大量の青葉を蒸すのが間に合わなくなったのです。

普通は丸い蒸籠で1枚ずつ、釜に載せて蒸します。良い茶を作るには、少量ずつの葉をかき混ぜながら短時間で蒸します。たくさん入ると蒸しムラができ、かといって長く蒸すと、色や香りだけでなく、歩留まりも悪くなります。人件費や薪代も悩みの種でした。

そこで明治7年から3年かけて発明したのが「三平蒸籠」です。外箱のなかに三段の蒸籠の枠が重なるようになっていて、下から引き出しては青葉を入れて上から重ねるのを繰り返します。引き出すたびに、上に載っている枠がガタリと落ち、そのはずみで中の葉がひっくり返り、一様に蒸しあがるというものでした。



【三平蒸籠】

一人で1時間に、15貫目から20貫目の生葉を蒸すことができ、能率は3倍に、薪は3分の1で済むようになったといいます。

明治7年の日本の茶の輸出

額は明治元年の約2倍にもなっていました。静岡・三重・京都・岐阜・埼玉を中心に茶の生産が活発になり、三平のような大規模経営も現れていました。ところが輸出の増加と国内外での熾烈な市場競争の中で問題になったのが粗製濫造でした。

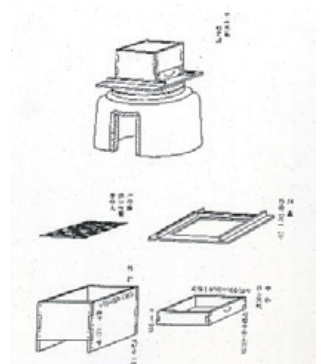
粗悪な茶が多く出荷され、良い茶でも粗悪茶と混ぜられてしまったり、着色されたりして評判を落していました。また、仲買人や外国商館が間に入るので、製茶農家に利益が少ないという問題もあったのです。

そこで、明治8年、直接アメリカに良質な茶を送り、生産者の利益を増やそうと考えた現在の入間市近在の有力茶業者たちが設立したのが県内初の株式会社「狭山会社」です。三平も発起人となり、社長は黒須村の繁田武平(満義)、副社長は三平の弟勘右衛門が就任しました。狭山会社では、製茶の改良を目的とし、社員には必要な資金の貸し付けもしました。

そのような中、三平蒸籠は、明治10年に上野で開かれた第1回内国勸業博覧会に出品されます。明治16年に神戸で開かれた第2回製茶共進会では、三平蒸籠を使った製茶が出品されました。

製茶工程の中で蒸しの良否はとても重要で、経費にも大きく影響する蒸し器の改良は、製茶改良の要でした。製茶器械の発明で名高い高林謙三が明治18年最初に特許をとったのも茶葉蒸し器械です。三平蒸籠は単純な仕組みでありながらとても便利で、身近な材料で作れるところが優れています。三平は見取り図を配っていて、多くの人に使ってもらうことが茶業の将来のためになると考えたのでしょう。雑誌にも取り上げられ、静岡県でも使われたそうです。

明治18年、三平は松方農商務大臣から功労金を授けられましたが、この年惜しくも66歳で亡くなりました。彼の墓は台石に三平蒸籠が象られたもので、狭山茶の振興に熱心だった仕事ぶりや人柄を彷彿とさせます。



手軽に収穫体験や自然体験が楽しめる、丸々一日遊べる小松沢レジャー農園

小松沢レジャー農園 生産管理部 町田 裕



1 小松沢レジャー農園の位置と概況

埼玉県で唯一棚田のある横瀬町で、52年前よりぶどう狩りやしいたけ狩りなどの体験型の農園を始めて以降はマスカミ取り、いちご狩りなどの体験を拡充し、現在は年間を通して13種類の体験と、溶岩BBQを中心とした飲食を提供しています。最寄りの西武線横瀬駅からはマイクロバス3台での送迎も対応しており、週末には多くのお客様で賑わっています。

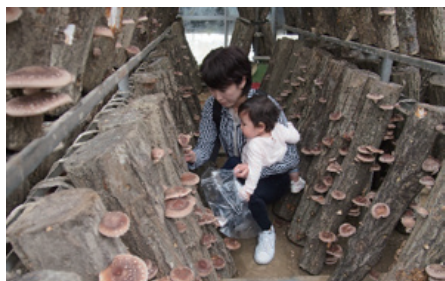


2 自社生産で徹底した管理を行っている農産物

お客様に提供しているいちご、ぶどう、しいたけは品質を保つために自社管理をしています。いちご栽培では、40年に渡るデータを活用し昔ながらの土での栽培を続け、美味しいいちごが収穫できています。

ぶどう栽培では、沢山の酵素肥料を撒いて土づくりを行い樹上完熟させたものを提供しており、収穫時期は遅れますが他では味わえない美味しいぶどうを提供しています。

しいたけは、市場で1割しか流通してないと言われる原木栽培に取り組んでおり、春と秋の年に2回しか収穫することのできない自然発生したしいたけを「幻の椎茸」として販売を行っています。



3 体験を通じて非日常の空間を提供する

ヤギやカモ・コイへの餌やりや川に入っただの水遊び、山を利用した一周30分のハイキングコースや途中にあるハンモックハウスなど、体験できるもののほとんどが日常生活の中では味わえないものをそろえていま

す。また、オープンガーデンよこぜの会員でもあり、四季折々の花木が楽しめるように園内整備も行っています。



4 富士山の溶岩を利用したBBQや自家製品の提供

400名収容できる屋根付きの屋外BBQ会場は団体予約にも対応しております。学校遠足向けには、収穫体験だけではなく農産物の生産過程など、農業の大変さややりがいについての説明も行っています。



5 今後の展望

地域をけん引する農業生産法人として、将来独立をしたい人に対応できるよう研修制度を設け、新規就農者を育てていくことを計画しています。食料生産は人間の活動の根幹なので必要不可欠な産業だと思います。離農農家の圃場を借り受け、生産活動を続けていける仕組み作りをしていく計画を立てています。

第1回 生徒指導の重層的支援構造について

県立総合教育センター 指導相談担当主任指導主事 なかがわ 中川 こずえ

1 はじめに

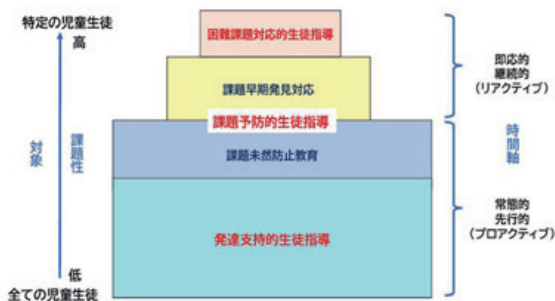
令和4年12月、生徒指導提要が12年ぶりに改訂となった。生徒指導提要とは何かということについては、その「まえがき」に記載があるとおり「生徒指導の実践に際し教職員間や学校間で共通理解を図り、組織的・体系的な取組を進めるよう」作成された「生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書」である。

総合教育センター指導相談担当は、「よい子の電話教育相談」で、児童生徒、保護者からの相談を行っているほか、年次研修や要請研修などで、教員に向けて生徒指導、教育相談についての様々な研修を行っている。

今年度、この「埼玉教育」において、生徒指導提要改訂のポイントを4回に分けて説明していく。

2 生徒指導の構造について

今回のテーマは、生徒指導の構造についてである。



改訂版では、「2軸3類4層構造」で整理している。

2軸とは時間軸のことで、課題が発生する前に行う「常態的・先行的対応（プロアクティブ）」と、課題が生じた後に行う「即応的・継続的対応（リアクティブ）」である。

また、対象範囲に基づく類型として「発達支持的生徒指導」（全ての児童生徒が対象）、「課題予防的生徒指導」（全ての児童生徒又は一部の児童生徒）、「困難課題対応的生徒指導」（特定の児童生徒）の三つに分類し、さらに「課題予防的生徒指導」を「課題未然防止教育」と「課題早期発見対応」の二つの層に分けることにより、4層として整理している。

発達支持的生徒指導とは、特定の課題を意識することなく、全ての児童生徒を対象に、全ての教育活動において進められるものであり、日々の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、授業や行事を通

じた個と集団への働きかけなどがそれにあたる。

課題未然防止教育とは全ての児童生徒を対象に、生徒指導の諸課題の未然防止をねらいとした、意図的・組織的・系統的な教育プログラムの実施のことであり、いじめ防止教育、SOSの出し方教育を含む自殺予防教育、情報モラル教育等が該当する。

課題早期発見対応は、課題の予兆行動が見られたり、問題行動のリスクが高まったりするなど、気になる一部の児童生徒を対象に、初期の段階で対応するのである。また、質問紙に基づくスクリーニングテストや、担任が生徒指導主事等と協力して支援チームを編成して対応することなどが挙げられる。

困難課題対応的生徒指導とは、いじめ、不登校、児童虐待など特別な指導・援助を必要とする特定の児童生徒を対象に、校内の教職員だけでなく、校外の関係機関との連携・協働による課題対応を行うものである。

今回の改訂版では、「いじめ」「暴力行為」「自殺」「中途退学」「不登校」「性に関する課題」の6項目、さらに教育相談においても、この「2軸3類4層」を用いて説明しており、それぞれの課題において、どの段階でどのような対応をすべきかを細かく示している。

今回、生徒指導の構造を整理した目的は、全ての生徒指導の土台は、全児童生徒を対象とした「発達支持的生徒指導」「課題未然防止教育」であり、何か起きた時に対応する「リアクティブ」ではなく、問題が起きる前に対応する「プロアクティブ」であることを示したことにある。生徒指導と言うと、課題が起き始めたことを認知したらすぐに対応する、あるいは、困難な課題に対し組織的に粘り強く取り組むというイメージが今も根強く残っている。しかし、起きてからどう対応するかという以上に、どうすれば起きないかという未然防止の重要性が改めて示された。

3 最後に

未然防止の観点が重要視されるこれからの生徒指導では、「いじめ」や「不登校」などにおいて、どの段階で、どのようなことをしなければならないかを、教職員があらかじめ理解しておく必要がある。

今回の改訂を機に、各学校における研修で、生徒指導提要の理解を深めていってもらいたい。

参考 生徒指導提要、文部科学省、令和4年12月



「校務効率化」を実現する校内組織マネジメントの向上に関する調査研究（中間報告）



県立総合教育センター企画調整担当・教育 DX 担当

1 はじめに ～埼玉県教育委員会が「学校における働き方改革基本方針」を令和4年4月に改定～

- 目標が「時間外在校等時間 月 45 時間以内、年 360 時間以内の教員数の割合を令和6年度末までに 100% に」と変更された。
- 「校務効率化」においてデジタル化の視点から教育 DX 担当とともに進めた。

2 目的

実践事例集を作成し学校へ提供することで、学校における働き方改革推進の一助とする。

3 仮説

企業や関係各課の先行事例を参考に「校内組織マネジメント向上」の観点から、ペーパーレス化及びデジタルツール等の有効活用を推進することで、教職員の負担軽減のための条件整備を実現できる。

4 研究方法 ～令和4年度の取組～

- 「教育条件整備」としての「校内組織マネジメント」の在り方に係る調査研究
- 企業や関係各課及び先進校の取組事例の調査
- 所員及び学校管理職向けの研修会（ウェビナー）の実施
- 総合教育センターにおけるペーパーレス化とデジタルツールの有効活用に係る実践

5 研究概要

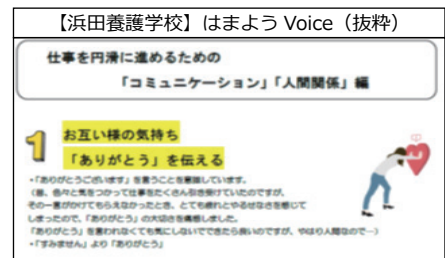
- 「校内組織マネジメント」の在り方に係る調査研究
 - ・ 吉川市立美南小学校
 - ・ 島根県立浜田養護学校
 - ・ リコージャパン株式会社
 - ・ 総合教育センター
- ペーパーレス化の推進に係る調査研究
 - ・ リコージャパン株式会社
 - ・ コクヨ株式会社
 - ・ 県庁 企画財政部 行政・デジタル改革課
 - ・ 総合教育センター
- デジタルツールの有効活用に係る調査研究

6 成果

- 所内
 - ・ 全体で取り組むデジタル化推進委員会を設置
 - ・ 会議の見直しを実施
 - ・ スペースの有効活用など室内の環境改善が実現
- 所員及び学校向け
 - ・ ウェビナーによる研修会の実施

7 おわりに ～令和5年度の取組～

- (1) 「校内組織マネジメント」の一層の向上を目指した調査研究
 - 学校の現状把握
 - 先行事例の情報発信
 - 総合教育センターにおける取組の推進
- (2) 「教職員の負担軽減のための条件整備」の更なる調査研究
 - 総合教育センターにおけるペーパーレス化の推進
 - 業務フローの作成



埼玉県立総合教育センターのホームページ
(<https://www.center.spec.ed.jp/>) から閲覧できます。

多様なニーズに応える

研修を用意しています！



令和5年度に実施する研修の一部を紹介します。
※詳しくは研修案内を御覧ください。

「探究的な学習」

に学校全体で取り組みたい

管理職・「探究的な学習」に本気で取り組む
学校マネジメント研修会

【対象】高等学校、特別支援学校の校長・副校長・教頭
【申込締切】 7月14日（金）

「教育DXの推進」

って何からやれば・・・

教育DXスタートアップ講座

【対象】小・中・高等学校、特別支援学校の教諭
【申込締切】 別途通知

授業にグローバルな視点を入れるには

国際理解教育実践研修
～SDGsと多文化共生の視点による～

「農福連携」って知っていますか？

特別支援学校と農業分野企業・法人をつなぐ
「農福連携」推進研修会

特別支援教育の理論や実践を学びたい

特別支援教育研修
～教員がつながるTひろば～

【対象】幼稚園、小・中・高等学校、特別支援学校の教諭
【申込締切】 6月23日（金）

今の学校課題をみんなで考える

みんなで考える生徒指導・教育相談

これからのキャリアプランを考えたい

男女共同参画推進・キャリアアップセミナー

【対象】高等学校、特別支援学校の教諭
【申込締切】 6月23日（金）

島根県の研修ってどんな内容だろう？

オンライン連携講座
島根県教育センター研修

総合教育センターは、教職員・学校をサポートします！

「要請研修」



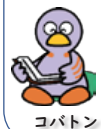
- ・「校長及び教員としての資質向上に関する指標」について
- ・新「生徒指導提要」について
- ・JICA国際協力推進員による日本語指導について など

「調査研究」



教育の抱えている課題の改善・解決のためにテーマを設定して取り組んでいます。
報告書はセンターHPからダウンロードできます。

「教育資料室」



17万冊を超える県内随一の教育関係の資料を所蔵しています。埼玉県内の先生方はどなたでも利用できます。

年間を通して、様々な情報をHPから発信しています。

未来を育てる**知**の拠点

埼玉県立総合教育センター
Saitama Prefectural Education Center



【センターHP】

教職員相談道しるべ

市立幼稚園で勤務しています。働き始めてからもう十年が経とうとしています。

個々のニーズに対応した適切な指導や支援ができるようになりたいと思っています。支援を要する園児への対応や保護者への支援等を中心に勉強してきました。

先日、卒園生とその保護者に会いました。特別な支援を必要とする園児でしたが、小学校に入学し、更に成長した姿を見て、また、明るく元気な姿を見ることができて、とても嬉しく思っています。

幼稚園は、学校教育の一環として、幼児期にふさわしい教育を行うものです。その教育は小学校以降の生活や学習の基盤になっています。そのため、幼稚園では、小学校との交流活動を位置付けているところが増えてきています。

小学校との連携を進めるために、子供同士が交流する機会を作ってみましょう。交流にあたっては、幼稚園と小学校における互いの教育的意義やねらいを明確にすることが必要です。

幼小でうまく連携するには？

現在、当園では、小学校一年の担任の先生との入学にあたっての連絡会がありますが、更に子供たちがどのように大きく成長していったか、見てみたいと思います。残念ながら、幼稚園での学びや経験が小学校でどう生かされているのかあまり勉強する機会がありません。成長していく子供の姿とそれを支える小学校教育を知ること、幼稚園における教育に生かせるはずは？

小学校との連携を更に進めていくにはどうしたらよいでしょうか。

(幼稚園E)

県立総合教育センター教職員研修担当
専門指導員 水野 義夫

まずは子供同士の交流から

そして、交流後には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、幼児を中心に、幼稚園・小学校の教師が幼児の育ちについて話し合いを行います。ともに保育・授業を振り返ることで、子供の学びのつながり、互いの教育内容や指導方法の違いや共通点について理解が深まっています。

子供の健全な成長を思いながら、互いの指導方法を工夫し、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図れるようにしていきます。

次号予告

令和5年度第2号(夏号) 8月刊行予定 の特集は

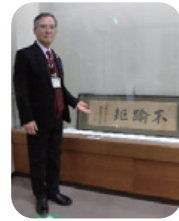
- ①生徒指導と教育相談の充実
- ②多様なニーズに対応した教育の実現 です。

巻頭言は、明治学院大学の小野教授に御執筆いただきます。
各学校での実践を多く紹介しますので御期待ください。

本号のアンケートは
右のQRコードから ▶



渋沢栄一の書



河田 重三

二〇二四年度上期から新一万円紙幣の顔となる渋沢栄一。二年前のNHK大河ドラマの主人公にもなり、渋沢栄一記念館には県内のみならず全国各地から、時には海外からも来館者がある。渋沢の歩んだ藍玉商いと尊王攘夷の企て、一橋家仕官から幕臣、パリ万博派遣、大蔵省勤務の青年期は明治維新前後の激動期であった。さらに、実業界での五百社余りの関与と六百を数える社会福祉・国際親善等の社会事業に携わった九十一年間の生涯を紹介する中で、とりわけ見学者の目を引くのが直筆の書である。展示物の書簡や、『論語』をはじめ漢籍の書写、扁額の書かれた年齢を伝えると感嘆の声があがるのである。

渋沢は自分の趣味を、「詩（漢詩）を創ること、筆をもって字を書くこと」と言っている。「青天を衝け」の言葉がある「内山峽」の漢詩は十八歳の時の創作である。栄一は五歳から父・市郎右衛門に『三字経』と言われる書物や『論語』を手本に読み書きを教わり、七歳からは従兄で十歳上の尾高惇忠の塾に通って学んでいる。そして、書は伯父の宗助から手ほどきを受けている。栄一の生家「中の家（なかんち）」は父の代に血洗島村の名主見習いとなり、名字帯刀を許されている。父の藍玉製造・販売の才覚が「中の家」を再興させ

たのである。その父は同族の「東の家（ひがしんち）」から婿養子に入った人で、その兄である宗助は「東の家」の三代目であり、幅広く商いを手掛け、「大（おお）渋沢」と言われるほどであった。

宗助は家業の傍ら養蚕を研究して『養蚕手引抄』を刊行（一八五五年）しているが、書については江戸から幕府御用豊師で能書家として知られる中村仏庵を師に迎え、いくつもの碑にその墨跡を残すほどの腕前であった。栄一の回顧談『雨夜譚会談話筆記』には「栄さんはなかなかうまい。おれの後が継げるよ。」と伯父宗助から書をほめられた言葉がある。仏庵独特の篆書くずしと言わばき書体を宗助が受け継ぎ、栄一の書に伝わっていると考えられ、晩年の書は自身の生き方を表すように律儀で文字への思いが込められた気品が感じられる。しかも、書簡であれば受け取る人への思いや文面とそれに合わせた書体で書かれ、漢籍の言葉には筆致に迷いはなく、栄一から直接論されるようにその教えが伝わってくるのである。

記念館では企画展に合わせて栄一直筆の扁額が展示されている。己巳（一九二九年）元旦の日付のある「不踰矩」の扁額は、栄一が終生傍らに置いて「孔子様に叱られはしまいか」と振り返った『論語』の一説で、「七十にして心の欲するところに従い、矩（のり）を踰（こ）えず」と道理に外れることのないように八十九歳の栄一が自らを戒めているのである。新年を迎えて漢詩を創り、書初めを習わしとした栄一の気迫も込められ、見る者の心に届く力強さがある。また、「為善最樂」（いぜんさいらく）は、『後漢書』からの故事で、善い行いをするのが最も楽しいことであるとの意味である。この扁額は記念館の所蔵する中でも最晩年の一九三一年に書かれたもので、この年の

十一月十一日に生涯を閉じている。晩年の栄一は国際平和に力を注ぎ、第一次世界大戦の休戦記念日（十一月十一日）にはラジオを通じて国際関係における忠恕の心を訴えている。栄一は、国と国とが争っているのは国民は幸せになれないとの思いは強く、老境に至ってもなお一層すべての人々の幸せを願う心が演説草稿の筆遣いから窺えられ、敬服するばかりである。

渋沢栄一の揮毫した書や碑は県内各地にある。深谷商業学校校舎（二層楼）落成時（一九二二年）には生徒を激励し、「士魂商才」と「至誠」を揮毫した。現在深谷記念館となった二層楼の展示室にて見ることが出来る。「長瀬は天下の勝地」の碑は秩父鉄道長瀬駅前に建っている。秩父の近代産業発展のため鉄道延伸を後押しした栄一は長瀬駅での開通式典で祝辞を述べている。加須の不動ヶ岡不動尊總願寺にある「論語碑」は「篤敬」の意味を説いた『論語』衛霊公の一説が揮毫されている。そして、黒須銀行に贈った「道德銀行」の書は、埼玉りそな銀行にある。栄一の書は世界各地の人々に寄り添い、「忠恕」と「公益」の志を今に伝えている。

プロフィール

公立小学校教諭、埼玉県立文書館地図センター担当主査、深谷市教育委員会指導主事、小学校教頭を二校、校長三校を務め、深谷市立桜ヶ丘小学校長で定年退職。埼玉大学教育学部非常勤講師、深谷市立常盤幼稚園長を経て、現在は深谷市の渋沢栄一記念館資料解説員。

令和4年度 第65回「埼玉県高校美術展」
優秀賞 受賞作品



「君の幸」

川越南高等学校 2年 なかむら 中村 はる 華琉

※学年は出品当時です。

令和4年度 第65回「埼玉県高校美術展」
埼玉県芸術文化祭実行委員会会長賞 受賞作品



「五月蠅い夜」

大宮光陵高等学校 2年 ふくはら福原 りょういち諒一

※学年は出品当時です。



埼玉教育 第77巻 第1号 (第821号)

編集・発行 埼玉県立総合教育センター
代 表 所長 田中 洋安
〒361-0021 埼玉県行田市富士見町 2-24

レイアウト 有限会社 マックスアーリー 熊谷市柿沼 841-5